

文化庁委託事業報告書

令和2年度日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業

留学生に対する日本語教師【初任】研修

独立行政法人 日本学生支援機構

大阪日本語教育センター

実施期間：令和2年6月9日～令和3年3月19日

目 次

1. はじめに

1. はじめに	
1.1. 研修の概要	1
1.2. 事業名称	1
1.3. 主催	1
1.4. 事業の実施期間	1
1.5. 事業の実施期間の内容	2
1.6. 本報告書の構成	2

2. 教育課程の検討

2. 教育課程の検討委員会	3
2.1. 目的	3
2.2. メンバー	3
2.3. 実施期間	3
2.4. 教育課程の検討委員会検討内容	4
2.5. 集中講義の日程・方式の変更	4
2.6. 研修のねらいとカリキュラム	4
2.6.1. 研修のねらい（自律学習型教員育成）	4
2.6.2. カリキュラム概要	5
2.6.3. 研修スケジュール	6
2.6.4. 集中講義の講師	6
2.6.5. 集中講義の実施方法	6
2.6.6. 講義内容と教育内容	7
2.6.7. 合計授業単位時間数と修了認定基準	9
2.6.8. 研修生の応募方式	9
2.6.8.1. 定員	9
2.6.8.2. 参加費	9
2.6.8.3. 申し込み	9
2.6.9. 研修生との連絡方法	9
2.6.10. レポート、課題	10
2.6.10.1. 内容	10
2.6.10.2. 提出方法	10
2.6.10.3. フィードバック	10
2.6.11. 事例集	10
2.6.12. 修了証明書	10
2.6.13. 講師との会議・打ち合わせ	10
2.6.14. 新型コロナウイルス感染症予防対策	11

3. 教材の検討・開発

3. 教材（日本語学校の事例集）の検討・開発委員会	12
3.1. 目的	12

3.2. メンバー	12
3.3. 実施期間	12
3.4. 具体的な教材の検討・開発	12
3.4.1. 教材のねらい	12
3.4.2. 教材の内容	13
3.5. 教材開発の成果と課題	13
3.5.1. 教材開発の成果	13
3.5.2. 教材開発の今後の課題	13

4. 養成・研修の実施

4. 養成・研修の実施	15
4.1. 目的	15
4.2. 研修実施期間	15
4.3. 受講生	15
4.3.1. 勤務先日本語教育機関別	15
4.3.2. 経験年数別	16
4.4. 研修の内容	16
4.4.1. 事前レポートの提出：現状把握	16
4.4.1.1. 内容	16
4.4.1.2. 提出状況	16
4.4.2. 集中講義：気づきと進化	17
4.4.2.1. スケジュールと講義内容	17
4.4.3. 集中講義の実施方法	18
4.4.4. 出席状況	18
4.4.5. 各講義内容	19
4.4.5.1. 「教育に活かすプレゼンテーション技術」	19
4.4.5.2. 「これからの日本語教育－技能別・目的別の教育－」	19
4.4.5.3. 「指導案作成・教室活動・教授法について」	20
4.4.5.4. 「日本で就職する留学生のために」	20
4.4.5.5. 「日本の留学生受入れ施策と日本語教育」	21
4.4.5.6. 「障害のある留学生の支援－発達障害と合理的配慮を中心に」	21
4.4.5.7. 「日本語コーパスデータの活用法について」	21
4.4.5.8. 「日本語教師が知っておくべき著作権」	22
4.4.5.9. 「事例研究：各々の学校現場で日々起こる事例から」	22
4.4.5.10. 「言語習得・言語理解・成績管理」	23
4.4.6. ブレイクアウトルーム	23
4.4.7. チャットイングループ	24
4.4.8. 日誌の提出	24
4.4.9. アンケートの実施	24
4.5. 事後課題とレポートの提出：気づきの確認・チャレンジへ	24
4.5.1. 事後課題（各講師からの課題）作成	24
4.5.1.1. 「教育に活かすプレゼンテーション技術」の課題	24
4.5.1.2. 「これからの日本語教育－技能別・目的別の教育－」の課題	24
4.5.1.3. 「指導案作成・教室活動・教授法について」の課題	25
4.5.1.4. 「日本で就職する留学生のために」の課題	25

4.5.1.5. 「日本の留学生受け入れ施策と日本語教育」の課題	25
4.5.1.6. 「障害のある留学生の支援－発達障害と合理的配慮を中心に－」の課題	25
4.5.1.7. 「日本語コーパスデータの活用法について」の課題	26
4.5.1.8. 「日本語教師が知っておくべき著作権」の課題	26
4.5.1.9. 「各々の学校現場で日々起こる事例から」の課題	26
4.5.1.10. 「言語習得・言語理解・成績管理」の課題	26
4.5.2. 課題提出状況	27
4.5.3. 課題のフィードバック	27
4.5.4. 事後レポート作成	27
4.5.4.1. 内容	27
4.5.4.2. 提出状況	27
4.5.4.3. 研修生へのフィードバック	28
4.6. 事例集	28
4.7. 研修後アンケートの実施	28
4.8. 修了認定	28

5. 事業全体の評価

5. 事業全体の評価委員会	29
5.1. 評価委員会の目的	29
5.2. メンバー	29
5.3. 期間	29
5.4. 事業全体の評価の観点	30
5.5. 事業全体の評価	30
5.5.1. カリキュラム	30
5.5.2. 研修生の取り組み	31
5.5.2.1. 集中講義への取り組み	31
5.5.2.2. 提出課題への取り組み	31
5.5.3. 作成教材	32
5.5.4. 運営・実施体制	32
5.5.5. 研修生アンケート	33
5.6. 総評	33
5.6.1. 成果	33
5.6.2. 今後の課題	33
5.6.3. 令和3年度事業への応募について	34

6. アンケート結果

6. アンケート	35
6.1. 集中講義後のアンケート	35
6.1.1. 5日間の集中講義について	35
6.1.1.1. 5日間の集中講義はどうでしたか	35
6.1.1.2. コメント（任意）	35
6.1.2. 集中講義の時間について	36
6.1.2.1. 研修期間（5日間）	36

6.1.2.2. 一日の研修時間	36
6.1.3. 個別の講義について	36
6.1.3.1. [12/7 月 午前] 大島先生「教育に活かすプレゼンテーション技術」	36
6.1.3.2. [12/7 月 午前] 野田先生「これからの日本語教育―技能別・目的別の教育―」	36
6.1.3.3. [12/8 火 午前] 建石先生「指導案作成・教室活動・教授法について」	37
6.1.3.4. [12/8 火 午後] 栗原先生「日本で就職する留学生のために」	37
6.1.3.5. [12/9 水 午前] 泉先生「日本の留学生受入れ施策と日本語教育」	37
6.1.3.6. [12/9 水 午後] 村田先生「障害のある留学生の支援―発達障害と合理的配慮を中心に」	37
6.1.3.7. [12/10 木 午前] 建石先生「日本語コーパスデータの活用法について」	38
6.1.3.8. [12/10 木 午後] 増田先生「日本語教師が知っておくべき著作権」	38
6.1.3.9. [12/11 金 午前] 大阪日本語教育センター 「事例研究：各々の学校現場で日々起こる事例から」	38
6.1.3.10. [12/11 金 午後] 森先生「言語習得・言語理解・成績管理」	38
6.1.4. 研修について	39
6.1.4.1. 今後このような研修があればまた参加しますか	39
6.1.4.2. もっと知りたい分野や興味がある分野があれば書いてください（任意）	39
6.1.5. その他	39
6.1.5.1. 研修管理システム（Leaf）の使用	39
6.1.5.2. 事務局の対応	39
6.1.5.3. ご意見ご感想がありましたら書いてください	40
6.2. 全研修終了後のアンケート	41
6.2.1. 研修はどうでしたか	41
6.2.2. 研修全体（事前レポート、集中講義、事後レポート、課題）を通して、 成長できたと思いますか	41
6.2.3. もし、今後このような研修があれば、ほかの日本語教員にも受講をすすめますか	41
6.2.4. ご意見・ご感想があればご記入ください（任意）	41

7. 研修資料

7. 研修資料	43
7.1. 開発教材（事例集）	43
7.1.1. 概要	43
7.1.2. 事例抜粋	45
7.2. 事前レポート 提出物	47
7.2.1. 日本語教育を志した理由	47
7.2.2. 現在の「業務内容」と「業務について努力している部分」について	47
7.2.3. 所属している日本語学校での使用教材や教授法、学生の特性等について	48
7.3. 日誌 提出物	49
7.3.1. [日誌] 12月7日（月）午前 大島先生の講義	49
7.3.2. [日誌] 12月7日（月）午後 野田先生の講義	49
7.3.3. [日誌] 12月8日（火）午前 建石先生の講義	49
7.3.4. [日誌] 12月8日（火）午後 栗原先生の講義	49
7.3.5. [日誌] 12月9日（水）午前 泉先生の講義	50
7.3.6. [日誌] 12月9日（水）午後 村田先生の講義	50

7.3.7. [日誌] 12月10日(木) 午前 建石先生の講義	50
7.3.8. [日誌] 12月10日(木) 午後 増田先生の講義	51
7.3.9. [日誌] 12月11日(金) 午前 大阪日本語教育センターの講義	51
7.3.10. [日誌] 12月11日(金) 午後 森先生の講義	51
7.4. 事後課題 提出物	52
7.4.1. [事後課題] 大島先生の課題	52
7.4.2. [事後課題] 野田先生の課題	52
7.4.3. [事後課題] 建石先生の課題	53
7.4.4. [事後課題] 栗原先生の課題	53
7.4.5. [事後課題] 泉先生の課題	54
7.4.6. [事後課題] 村田先生の課題	55
7.4.7. [事後課題] 建石先生の課題	56
7.4.8. [事後課題] 増田先生の課題	57
7.4.9. [事後課題] 大阪日本語教育センターの課題	57
7.4.10. [事後課題] 森先生の課題	59
7.5. 事後レポート 提出物	61
7.5.1. 研修で学んだこと	61
7.5.2. 今後の日本語教育に対する抱負	61

文化庁委託事業報告書

1. はじめに

本事業は令和2年度文化庁委託事業であり、日本語教育人材の研修カリキュラム開発の「留学生に対する日本語教師【初任】研修」である。本報告書はその成果物である。

1.1. 研修の概要

本研修は、文化審議会国語分科会『日本語教育人材の養成・研修のあり方について（報告）改訂版』で示されている「日本語教育人材に求められる資質・能力」を育むために「日本語教育人材の養成・研修の在り方及び教育内容」に基づき教育課程を策定し、実施するものである。その目的は、今後、各現場の日本語教育を支えてゆくだけでなく、今後の日本語教育全体を担っていくであろう初任日本語教員の教育力向上である。

本研修では、日本語教育の分野のみならず、異文化背景の学生や発達障害の学生への対応、キャリア教育、著作権や留学生の受け入れに関する法律、プレゼンテーションのスキルなど各分野を牽引してきたトップレベルの講師からの最先端の講義を受ける1週間の集中講義の期間を設けた。さらに、その集中講義の事前と事後にレポートや講義の課題の提出を課し、その作成期間を含めて、研修全体のプログラムとした。

これにより、研修生が、優れた授業を実施できるだけでなく、日本語学校の現場でのさまざまな事例や課題に対処できる幅広い実践的な能力と視野を自律的に身につけ、将来的には効果的な教育計画作成や新任教員指導にも関わっていける日本語教師、様々な場面で学生から信頼される日本語教師となっていくことを目指した。

また、講師や研修生を交えてのディスカッションや意見交換を通して、日本語学校ならではの日々の悩みや困りごとを語り合い、共に問題を解決してゆく力を身につける全員参加型の研修になることを意図した。

1.2. 事業名称

日本語学校初任日本語教員のためのスキルアップ研修

1.3. 主催

独立行政法人日本学生支援機構大阪日本語教育センター

1.4. 事業の実施期間

令和2年6月9日～令和3年3月19日（10か月間）

1.5. 事業の実施期間の内容

以下の事業の実施期間の表1にあるように、(a)教育課程の検討 (b)教材の検討・開発 (c)養成・研修の実施 (e)事業全体の評価の4つの期間に分類されている。

表1 事業の実施期間

実施期間	令和2年度												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
(a)教育課程の検討			→										
(b)教材の検討・開発			→										
(c)養成・研修の実施								→					
(d)その他関連する取組													
(e)事業全体の成果の評価										→			

1.6. 本報告書の構成

以下、本報告書は上記表1の分類通りに、「2. 教育課程の検討」「3. 教材の検討・開発」「4. 養成・研修の実施」「5. 事業全体の評価」の順に報告してゆく。6. は研修アンケート、7. は研修資料である。

2. 教育課程の検討

2. 教育課程の検討委員会

日本語学校初任日本語教員のためのスキルアップ研修の実施検討委員会を開催した。

2.1. 目的

『日本語教育人材の養成・研修のあり方について（報告）改訂版』で示されている「日本語教育人材の養成・研修の在り方及び教育内容」「日本語教育人材の養成・研修における教育課程編成の目安」に基づき、初任日本語教員を対象とする研修の教育課程を策定する。また、円滑な研修を実現するために、運営・実施計画を立てる。

2.2. メンバー

委員会メンバーは、学内の委員長と委員3名に、講師8名のうち1名を学外委員、7名を助言者とした。

	氏名	所属・職名
委員長	水落 いづみ	大阪日本語教育センター 副センター長
委員	清水 孝司	大阪日本語教育センター 教員
	磯田 郁子	大阪日本語教育センター 教務主幹
	川村 光代	大阪日本語教育センター 主幹補佐
学外委員	建石 始	神戸女学院大学文学部 教授
助言者	大島 武	東京工芸大学芸術学部 教授
	野田 尚史	国立国語研究所 教授
	栗原 由加	神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部 教授
	泉 博朗	泉行政書士事務所 所長
	村田 淳	京都大学学生総合支援センター 准教授
	増田 拓也	弁護士法人色川法律事務所 弁護士
	森 篤嗣	京都外国語大学外国語学部 教授

2.3. 実施期間

令和2年6月9日～ 令和2年12月11日

大阪日本語教育センター内で行った定例の対面での会議には、学内の委員長と委員3名が参加した。学外委員と助言者とは、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から基本的に個別にZoom、メールや電話等で検討を行った。（当初、個別に各研究室や所属機関に訪問する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、最低限にとどめた。）

2.4. 教育課程の検討委員会検討内容

- ① 全体的なカリキュラム
- ② 全体スケジュール
- ③ 集中講義の担当講師
- ④ 研修生の募集方式
- ⑤ 参加者の選定
- ⑥ 集中講義（対面方式 令和2年8月3日～8月7日）の実施内容
- ⑦ 集中講義の日程・方式の変更
- ⑧ 集中講義（オンライン方式 令和2年12月7日～12月11日）
内容、時間（講義・質疑応答）、構成（講義・ディスカッション・発表）、事後課題 等
- ⑨ Zoomでの開催方法
- ⑩ 効果的な討論形式（ブレイクアウトルーム、チャット）等
- ⑪ 事前レポート、事後レポート、日誌
内容、提出時期、提出方法、提出後の活用方法、フィードバック方法 等
- ⑫ 事後課題
内容、フィードバック方法 等
- ⑬ 司会、運営スタッフ等
- ⑭ 研修生との連絡方法
- ⑮ 修了証明書、アンケート等
- ⑯ 新型コロナウイルス感染症予防対策

2.5. 集中講義の日程・方式の変更

当初は令和2年8月に対面形式の集中講義を大阪で行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑みて、オンライン方式で令和2年12月に行うこととした。

2.6. 研修のねらいとカリキュラム

2.6.1. 研修のねらい（自律学習型教員育成）

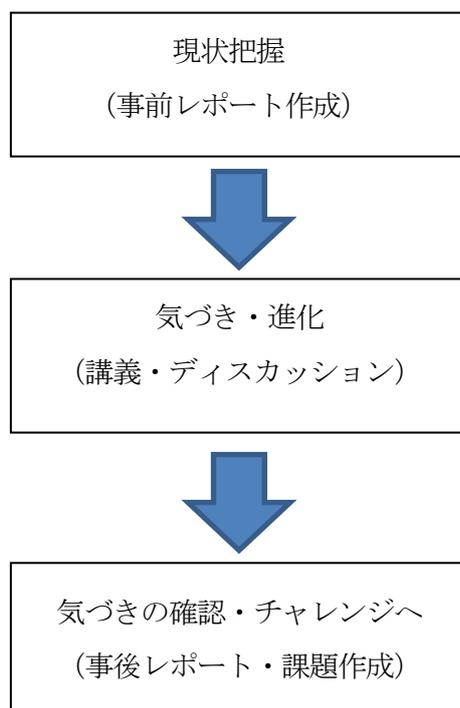
本研修は、自らの現状を自分で把握し、研修によって気づきを得、進化しチャレンジしてゆく自律学習型教員育成を目指した。そして、本研修はそれを手助けするためのさまざまな機会を提供できるように策定した。

本研修は、以下のように大きく「事前レポート」「集中講義」「事後課題とレポート」の3つの期間に分けられる。

まず、研修生は、自己の内省と事前レポート作成によって自分がおかれている現状を把握する。次に、集中講義や他の研修生とのディスカッションを通して新たな気づきと進化を得る。最後に、講義後の課題とレポート作成により、自分の気づきと進化を確認し、将来の新しいチャレンジに結

び付けるという過程を踏む。

図にして表示すると次のような過程となる。



2.6.2. カリキュラム概要

「事前レポート」「集中講義」「事後課題とレポート」の単位時間数（全 90 単位時間：1 単位時間 50 分）は表 2 のとおりである。

表 2 カリキュラム単位時間数

過程	研修形態		単位時間数	文化庁報告書科目名※
現状把握	事前レポート	4 件	12	(4) 実践・実習
気づき・進化	集中講義	10 講義	30	(1) 日本の留学生施策 (2) キャリア教育と学習者心理 (3) メディアリテラシーと情報 (4) 実践・実習 *各講義によって(1)~(4)は異なる
気づきの確認 チャレンジへ	事後課題	10 件	40	(1) 日本の留学生施策 (2) キャリア教育と学習者心理 (3) メディアリテラシーと情報 (4) 実践・実習 *各講義によって(1)~(4)は異なる
	事後レポート	2 件	8	(4) 実践・実習

※ 文化審議会国語分科会『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』p.81 にならった。

2.6.3. 研修スケジュール

研修スケジュール（日程変更後）は以下の通りに決定した。

I. 事前レポート作成期間

令和2年11月9日（月）～11月30日（月）

II. 集中講義（オンライン）期間

令和2年12月7日（月）～12月11日（金）

III. 事後課題とレポート作成期間およびフィードバック期間

令和2年12月12日（土）～令和3年2月28日（日）

2.6.4. 集中講義の講師

集中講義の講師は以下の通りに決定した。

- ・大島 武（東京工芸大学芸術学部 教授）
- ・野田 尚史（国立国語研究所 教授）
- ・建石 始（神戸女学院大学文学部 教授）
- ・栗原 由加（神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部 教授）
- ・泉 博朗（泉行政書士事務所 所長）／*岡部 敏明（岡部国際行政書士法人代表行政書士）
- ・村田 淳（京都大学学生総合支援センター 准教授）
- ・増田 拓也（弁護士法人色川法律事務所 弁護士）
- ・森 篤嗣（京都外国語大学外国語学部 教授）
- ・大阪日本語教育センター教員（磯田 郁子 ／ *川村 光代 ・*清水 孝司）

（ * 岡部敏明講師・川村光代教員・清水孝司教員は補助者として参加する ）

2.6.5. 集中講義の実施方法

新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点から、すべて Zoom によるオンラインで行うことにした。集中講義開催にあたっては、実施時期が大阪日本語教育センターの授業期間と重なったことから、オンライン講義のためのホスト会場（大阪国際交流センター3F会議室）を確保した。集中講義開催期間中、安定した通信速度が担保された占有のインターネット回線が必要であると判断し、臨時のインターネット回線（NTT 西日本・フレッツ光ネクスト ファミリー・スーパーHS 隼）を調達した。また、円滑なオンライン集中講義を目指し、専門の Zoom 操作者と補助者を集中講義中にそれぞれ1名配置した。

2.6.6. 講義内容と教育内容

表2に「担当講師」「科目名」「目標」「教育内容※」等を加えたものが以下の表3である。本研修では、単位時間は授業を受講する時間、および課題に取り組む時間を指す。集中講義の教育方法はオンラインとし、教材は各講師作成のスライド等を使用する。なお、教育内容は文化審議会国語分科会『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』p.49にならったものである。

表3 講義内容と教育内容

研修形態	内 容		単位 時間	教育内容
事前 レポート	目 標	勤務校・自己の現状把握、自己の内省力の強化	12	(8) 演習
集 中 講 義	講 師	大島 武（東京工芸大学芸術学部 教授）	3	(8) 演習
	科目名	「教育に活かすプレゼンテーション技術」		
	目 標	プレゼンテーション力・コミュニケーション力の強化		
	講 師	野田 尚史（国立国語研究所 教授）	3	(8) 演習
	科目名	「これからの日本語教育―技能別・目的別の教育―」		
	目 標	日本語に対する理解力・教育力強化		
	講 師	建石 始（神戸女学院大学文学部 教授）	3	(8) 演習 (9) 留学生のための教材・ 教具のリソース
	科目名	「指導案作成・教室活動・教授法について」		
	目 標	教育力強化		
	講 師	栗原 由加 （神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部 教授）	3	(5) 進路選択関連情報
	科目名	「日本で就職する留学生のために」		
	目 標	キャリア教育力強化		
	講 師	泉 博朗（泉行政書士事務所 所長）	3	(1) 日本の留学生受入れ施策 (2) 法務省告示日本語教育 機関の歴史と現状 (3) 日本語の試験
	科目名	「日本の留学生受入れ施策と日本語教育」		
	目 標	留学生施策に対する理解力強化		
講 師	村田 淳（京都大学学生総合支援センター 准教授）	3	(6) 留学生の異文化受容・ 適応 (7) 日本語の学習・教育の 情意的側面	
科目名	「障害のある留学生の支援―発達障害と合理的配慮を 中心に」			
目 標	障害のある留学生に対する理解・支援力強化			
講 師	建石 始（神戸女学院大学文学部 教授）	3	(8) 演習 (9) 留学生のための教材・ 教具のリソース	
科目名	「日本語コーパスデータの活用法について」			
目 標	日本語コーパスデータの活用力強化			
講 師	増田 拓也（弁護士法人色川法律事務所 弁護士）	3	(10) 著作権	
科目名	「日本語教師が知っておくべき著作権」			
目 標	著作権に対する理解力強化			

	講師	大阪日本語教育センター教員	3	(3) 日本語の試験 (4) 日本と海外の教育制度の 違い (8) 演習
	科目名	「事例研究：各々の学校現場で日々起こる事例から」		
	目標	教師力強化		
	講師	森 篤嗣（京都外国語大学外国語学部 教授）	3	(8) 演習 (11) 統計処理
	科目名	「言語習得・言語理解・成績管理」		
	目標	言語理解・実践力強化		
事後課題	講師	大島 武（東京工芸大学芸術学部 教授）	4	(8) 演習
	目標	プレゼンテーション力・コミュニケーション力の強化		
	講師	野田 尚史（国立国語研究所 教授）	4	(8) 演習
	目標	日本語に対する理解力・教育力強化		
	講師	建石 始（神戸女学院大学文学部 教授）	4	(9) 留学生のための教材・ 教具のリソース
	目標	日本語教育ツールの活用法		
	講師	栗原 由加 （神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部 教授）	4	(5) 進路選択関連情報
	目標	キャリア教育力強化		
	講師	泉 博朗（泉行政書士事務所 所長）	4	(1) 日本の留学生受入れ施策
	目標	留学生施策に対する理解力強化		
	講師	村田 淳（京都大学学生総合支援センター 准教授）	4	(6) 留学生の異文化受容・ 適応 (7) 日本語の学習・教育の 情意的側面
	目標	障害のある留学生に対する理解・支援力強化		
	講師	建石 始（神戸女学院大学文学部 教授）	4	(8) 演習 (9) 留学生のための教材・ 教具のリソース
	目標	日本語コーパスデータの活用力強化		
	講師	増田 拓也（弁護士法人色川法律事務所 弁護士）	4	(10) 著作権
目標	著作権に対する理解力強化			
講師	大阪日本語教育センター教員	4	(6) 留学生の異文化受容・ 適応 (8) 演習	
目標	教師力強化			
講師	森 篤嗣（京都外国語大学外国語学部 教授）	4	(8) 演習 (11) 統計処理	
目標	言語理解・実践力強化			
事後 レポート	目標	総括と今後のチャレンジ、自己の内省力の強化	8	(8) 演習

2.6.7. 合計授業単位時間数と修了認定基準

合計授業単位時間数は90単位時間（1単位時間50分）、修了認定に必要な単位時間数は72単位時間（80%）とする。講義の欠席や、課題やレポートの未提出（不十分）で、72単位時間に満たないと評価委員会で判断された場合は、修了と認定しない。

2.6.8. 研修生の応募方式

2.6.8.1. 定員

40名程度の予定で、以下の条件を満たす教員とした。

① 留学告示別表第一または第二に掲げる日本語教育機関の常勤日本語教員

（日本語教師歴0年から5年程度）

* 条件を「常勤」としたことと日程を変更したことから教育歴の範囲に少し幅を持たせた。

② 令和2年10月から令和3年1月までの研修期間を通じて、以下のすべての研修を受講できる教員

(a) 事前研修：事前のレポートを提出する。

(b) 集中講義への参加：令和2年12月7日（月）～12月11日（金）の集中講義の全日程に出席し、期間中の毎日、日誌を提出する。

(c) 事後研修：事後のレポートと課題を提出する。

2.6.8.2. 参加費

無料。ただし、オンラインでの研修を受講するためのインターネットへの接続等に伴う経費は自己負担とした。

2.6.8.3. 申し込み

① 申し込み方法

HP上に『日本語学校初任日本語教員のためのスキルアップ研修』の内容を掲載し、以下のページからオンラインで申し込む。

https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/jlec/ojlec/research/kenshu.html

② 申し込み期間

令和2年9月14日（月）～9月30日（水）

③ 受講生の決定

申請内容を審査の上、令和2年10月初旬に受講の可否を通知する。

2.6.9. 研修生との連絡方法

研修生との情報や資料のやり取り、レポートや課題、日誌等の提出のために株式会社インソースの研修管理システム「Leaf（リーフ）」ASPサービス（以下、Leaf（リーフ））を採用した。また、個別

の連絡事項や Leaf（リーフ）の使用期間終了後はメールを用いることとした。

2.6.10. レポート、課題

2.6.10.1. 内容

事前レポート、事後レポートの内容については、検討委員会で決定する。集中講義後の事後課題については、各講義担当講師が講義内容をふまえて決定する。また、講義内容のさらなる理解、発展につながる参考図書も紹介してもらうこととした。

2.6.10.2. 提出方法

内容の提示、提出は Leaf（リーフ）を用いることとした。研修生にはシステムへログインするためのアカウントを発行し、Web 上のシステムを通じて研修生からの提出物の受付を行い、データを集約した。

2.6.10.3. フィードバック

事前レポート、事後レポート、事後課題を提出した研修生全員に、集中講義担当講師や大阪日本語教育センターの教員よりフィードバックを行う。

2.6.11. 事例集

事前レポートとして研修生から提出される日本語学校で日々起こる事例をまとめ、集中講義の中で質疑応答、議論、共有教材として使用する。それを研修後に冊子にまとめて、共有教材として活用できるように研修生に送付する。

2.6.12. 修了証明書

修了認定に必要な単位時間数 72 単位時間を取得し、評価委員会で修了が認められた研修生に、大阪日本語教育センターより修了証明書を送付する。

2.6.13. 講師との会議・打ち合わせ

新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、Zoom やメールや電話等で講師との会議・打ち合わせを行った。

- ① 講義内容
- ② 講義の時間配分
- ③ 当日の連絡方法
- ④ 講義の後の事後課題の内容、提出された事後課題へのフィードバック
- ⑤ 集中講義の録画の許可（主催者が zoom で録画する。研修生は録画禁止）
- ⑥ 研修生からの事前質問の扱い

- ⑦ ブレイクアウトルームでのディスカッション内容

2.6.14. 新型コロナウイルス感染症予防対策

集中講義を対面からオンライン形式に変更し、講義担当講師との会議・打ち合わせを非対面にしたことの他に、集中講義の実施に際して以下のことに留意した。

- ① ホスト会場用に十分な広さの部屋を確保する。
- ② ホスト会場に入る運営スタッフの数を限定する。
- ③ 司会や運営スタッフの机は十分に距離を取り、司会以外は常にマスクを着用する。
- ④ ホスト会場には手指消毒液を置き、手指の消毒、机などの消毒、定期的な換気を徹底した。

3. 教材の検討・開発

3. 教材（日本語学校の事例集）の検討・開発委員会

日本語学校初任日本語教員のためのスキルアップ研修の教材検討・開発委員会を開催した。

3.1. 目的

本研修の教材として、初任日本語教員が遭遇するであろう問題の解決の一助となるような教材を作成することを目指す。知識的なものに終始するのではなく、現場の実情に基づいたものになるように配慮する。

3.2. メンバー

委員会は学内の委員長と委員3名と学外委員1名(講師のうちの1人。実施検討委員会委員を兼ねる)で構成する。

	氏名	所属・職名
委員長	水落 いづみ	大阪日本語教育センター 副センター長
委員	清水 孝司	大阪日本語教育センター 教員
	磯田 郁子	大阪日本語教育センター 教務主幹
	川村 光代	大阪日本語教育センター 主幹補佐
学外委員	建石 始	神戸女学院大学文学部 教授

3.3. 実施期間

実施期間：令和2年6月9日 ～ 令和3年3月19日

大阪日本語教育センター内で行った対面での会議には学内の委員長と委員3名が参加した。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から学外委員には来校を要請せず、基本的に個別にZoomの打ち合わせやメールでのやりとり等で会議を行った。

3.4. 具体的な教材の検討・開発

3.4.1. 教材のねらい

それぞれの日本語学校では日々様々な問題に直面しているが、その事例に対処するので精一杯で、それらの事例を整理したり、各事例にどのように対処すべきだったかを反省する余裕もないのが実情である。また、他の日本語学校でどのような事例が発生しているかという情報を共有する機会も少ない。そこで、全国の日本語教員と一緒にさまざまな事例を議論し、解決策を模索、共有できるような事例研究の教材を作成する。事例研究を通して、日本語教師として主体的・協働的に考え、行動できるようになることを目指すものである。

3.4.2. 教材の内容

【集中講義（事例研究）での使用教材】

研修生から今まであったさまざまな教育上、学生の生活上の事例を事前レポートとして提出してもらい、今まで日々ぶつかってきた困りごとや失敗例、成功例を教材としてまとめた。さらに、大阪日本語教育センターでも事例を収集した（計 215 件）。それらの事例を「日本語の教育」と「それ以外」に分類し、さらに下位分類を行い、事例研究の講義での議論や意見交換の教材とした。

【研修後の送付教材】

215 件の事例の中から、初任教員が直面する事例（研修生からの事例 154 件）に絞って冊子にまとめ、研修後の教材とした。（7.1 参照）

非常に幅広い範囲の事例を、まず大きく、主に教室での「授業に関わるもの」（70 件）と「授業以外のもの」（84 件）の二つに分類を行った。「授業に関わるもの」はさらに、「会話の指導」「教え方・授業準備」「学生対応」「漢字の指導」「オンライン授業」「発表・プレゼンテーション」等の 21 の下位分類に分けた。「授業以外のもの」はさらに、「学生対応」「進学・就職」「異文化トラブル」「アルバイト」「出席不良」等の 14 の下位分類に分けた。そして、各分類のところには実例としていくつかの典型的な事例を挙げた。

冊子にまとめたものは、各学校での今後の教育活動に活かしてもらえるように研修生に送付した。

3.5. 教材開発の成果と課題

3.5.1. 教材開発の成果

- ① 日本語学校の教員がどれだけの業務や課題に直面しているかということが概観できる生のデータとなっている。
- ② 日本語学校の教員が直面する事例が授業以外にも多いことがわかった。
- ③ 他の学校でも同じような事例があるということがわかり、他校と共有できる事例集となっている。
- ④ 自分の学校でまだ経験がない事例についてもわかり、今後の起こりうる事例にどう対応すればよいかの参考となる。

3.5.2. 教材開発の今後の課題

- ① 分類は、できるかぎり客観的な立場を心掛けたが、分類と内容の精度を高めるためにはより多くの事例を収集する必要がある。
- ② 初任教員だけでなく、中堅教員、主任教員の事例も収集すれば、それぞれの段階での事例が概観できる生のデータとなる。

- ③ 各事例に対する解決策は各学校の状況によっても異なり、唯一の正解の提示は難しい。今回の事例集には載せられなかったが、複数の案が提示できれば、同様の事例で困っている教員の指針となるだろう。実際、集中講義の間では様々な研修生から、自分のところではこうしている、このようにしてはどうかというアドバイスが多数寄せられた。

4. 養成・研修の実施

4. 養成・研修の実施

日本語学校初任日本語教員のためのスキルアップ研修を実施した。

4.1. 目的

今後、各現場の日本語教育を支えてゆくだけでなく、日本語教育全体を担っていく日本語教員としての知識・技能・態度の向上を目的とするものである。また、自律的に成長する姿勢、同程度のキャリアの教員とのつながりを持つことにより、協働して成長する姿勢を養う。

4.2. 研修実施期間

令和2年11月9日～令和3年2月28日

I. 事前レポート作成期間

令和2年11月9日（月）～11月30日（月）

II. 集中講義（オンライン）期間

令和2年12月7日（月）～12月11日（金）

III. 事後課題とレポート作成期間およびフィードバック期間

令和2年12月12日（土）～令和3年2月28日（日）

4.3. 受講生

研修受講生は34名（5名辞退）、研修生の詳細は以下のとおりである。

4.3.1. 勤務先日本語教育機関別

勤務先日本語教育機関 所在地域	勤務先日本語教育機関 所在都道府県	受講者数
東北	岩手県	1
関東	群馬県	1
	東京都	4
中部	静岡県	1
	三重県	1
近畿	京都府	4
	大阪府	10
	兵庫県	3
	奈良県	2
中国	広島県	3

四 国	高知県	1
九州・沖縄	福岡県	2
	沖縄県	1
合 計		34

4.3.2. 経験年数別

日本語教育経験年数 (応募時点)	1年未満	7
	1年～2年未満	8
	2年～3年未満	5
	3年～4年未満	3
	4年～5年未満	5
	5年以上	6
	計	34

4.4. 研修の内容

4.4.1. 事前レポートの提出：現状把握

これまでの事例の記述、自身の状況のまとめを通して、現在の自分の環境、業務内容、学生との関係に目を向け、自分が置かれている状況を把握する。

4.4.1.1. 内容

- ① 勤務している日本語学校で今まで直面してきたさまざまな教育上、生活指導上で困ったことや、失敗と成功の事例
- ② 日本語教育を志した理由（A4判1枚程度）
- ③ 現在の「業務内容」と「業務について努力している部分」（A4判1枚程度）
- ④ 所属している日本語学校での使用教材、教授法等について（A4判1枚程度）
- ⑤ 集中講義の各先生方への質問

※ 上記①については、まとめたもの（事例集）を、集中講義の中で質疑応答、議論、共有教材として使用する。それを研修後に冊子にまとめて、共有教材として活用できるように研修生に送付する。

4.4.1.2. 提出状況

34名中34名提出（100%）、うち2名はLeaf（リーフ）へのアップロードがうまくいかなかったため提出期限に遅れた。提出されたレポートには、研修生が自分自身の状況を誠実に見つめ直している様子が記され、日本語を学ぶ留学生のために日本語教師として貢献したいという思いとそのための日々の努力がしっかりと綴られていた。（7.2 参照）

4.4.2. 集中講義：気づきと進化

様々な分野のトップレベルの講師からの講義により新たな気づきを得る。また、ブレイクアウトルームにより、全国からの日本語教師との議論と交流により、新たな気づきを得、進化する。

4.4.2.1. スケジュールと講義内容

日程	時間	講義タイトルと講師
12月 7日(月)	9:20	開講式
	9:30 ～12:05	「教育に活かすプレゼンテーション技術」 大島 武 (東京工芸大学芸術学部 教授)
	13:15 ～15:50	「これからの日本語教育—技能別・目的別の教育—」 野田 尚史 (国立国語研究所 教授)
12月 8日(火)	9:30 ～12:05	「指導案作成・教室活動・教授法について」 建石 始 (神戸女学院大学文学部 教授)
	13:15 ～15:50	「日本で就職する留学生のために」 栗原 由加 (神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部 教授)
12月 9日(水)	9:30 ～12:05	「日本の留学生受入れ施策と日本語教育」 泉 博朗 (泉行政書士事務所 所長)
	13:15 ～15:50	「障害のある留学生の支援—発達障害と合理的配慮を中心に」 村田 淳 (京都大学学生総合支援センター 准教授)
12月 10日(木)	9:30 ～12:05	「日本語コーパスデータの活用法について」 建石 始 (神戸女学院大学文学部 教授)
	13:15 ～15:50	「日本語教師が知っておくべき著作権」 増田 拓也 (弁護士法人色川法律事務所 弁護士)
12月 11日(金)	9:30 ～12:05	「事例研究：各々の学校現場で日々起こる事例から」 大阪日本語教育センター
	13:15 ～15:50	「言語習得・言語理解・成績管理」 森 篤嗣 (京都外国語大学外国語学部 教授)
	15:50	閉講式

4.4.3. 集中講義の実施方法

Zoom を使ったオンライン方式で実施した。大阪日本語教育センターのスタッフは、大阪国際交流センターの会議室に集まり、司会や連絡、調整等を行った。講師は、各々自宅や研究室から講義を行い、研修生は自宅や職場で受講した。自宅が近い泉先生のみ会議室で講義をされた。

オンラインでの講義であったが、受講生には常時顔を出しての受講をお願いしたこともあり、常に緊張感のある講義となった。さらに、互いの顔がよくわかり、ディスカッション等の様々な場面でコミュニケーションが取りやすくなった。各講義の最初と最後は全員の拍手で講師への感謝を示し、オンラインの講義で生じる講師と研修生の距離をできるかぎり縮められるように努めた。

4.4.4. 出席状況

講義ごとの出席状況は以下のとおりである。(研修生 34 名)

	9:30 ~ 12:05	出席者数	13:15 ~ 15:50	出席者数
12月7日(月)	教育に活かすプレゼンテーション技術	34名	これからの日本語教育	34名
12月8日(火)	指導案作成・教室活動・教授法について	33名	日本で就職する留学生のために	34名
12月9日(水)	日本の留学生受入れ施策と日本語教育	34名	障害のある留学生に対する理解・支援強化	33名
12月10日(木)	日本語コーパスデータの活用力強化	34名	日本語教師が知っておくべき著作権	34名
12月11日(金)	事例研究	34名	言語習得・言語理解・成績管理	34名

4.4.5. 各講義内容

4.4.5.1. 「教育に活かすプレゼンテーション技術」

講 師：大島 武 東京工芸大学芸術学部 教授

日 時：令和2年12月7日（月）9:30 ～ 12:05

目 標：プレゼンテーション力・コミュニケーション力の強化

使用教材：大島武先生作成のスライド、レジュメ

講義概要：

日本語教師に必要なプレゼンテーション技術、コミュニケーション技術向上のための講義である。以下のような具体的な技術の例を挙げるわかりやすい講義で、「これくらいはわかるだろう。当然相手もこう考えるだろうという思い込みは、人に伝える際には慎まなければならない」「よいコミュニケーションには『想像力』が欠かせない」「質問が出るのは、いい授業をしているからで、全く分からない、ほとんどわからない場合は質問が出ない」「自分が何を話したいかではなく、相手が何を聞きたいかで考える」「大枠から話す。具体的に話す」「図に書けない（構造化できない）話ほしくない」「相手の土俵に立って、相手の知識と関連付けて話をする」「接続詞やスライド変更の際に、間をとる」「アイコンタクトをとる」「スマイル（好意の返報性）は意図的に作る」「ゆっくり話す。自分は知っていることでも、相手は初めてのことだから」等、教育制度の異なる異文化間の思い込みによる誤解や、話を構造化するという論文指導等にも役立つ内容であった。

- ◆ ブレイクアウトルームでの討議（1回）：①講義で興味深かったこと ②講義への質問
- ◆ 質疑応答

4.4.5.2. 「これからの日本語教育—技能別・目的別の教育—」

講 師：野田 尚史 国立国語研究所 教授

日 時：12月7日（月）13:15 ～ 15:50

目 標：日本語に対する理解力・教育力強化

使用教材：野田先生作成のスライド

講義概要：

技能別（「聞く」「話す」「読む」「書く」）の日本語教育、目的別の日本語教育という今後の日本語教育に必要な視点からの講義であった。

「聞く」ための日本語教育においては、たとえば、省略されている部分が留学生にはわからないため、誤解する可能性がある。「話す」ための日本語教育においては、自分の発話を訂正するための文法や表現、聞き取れなかった部分を聞き返すための文法や表現が必要である。「読む」ための日本語教育においては、「など」が含まれる文の構造や「は」と「が」の機能の違いを理解するのは困難である。「書く」ための日本語教育においては、長い文を短くするための文法や依頼を断る文を書く文法や戦略が必要であるなどが、具体例を挙げて述べられた。

学習者のバックグラウンドや学習目的は多様化し、目的別の日本語教育はますます細分化していく

が、そのため日本語教師としてやるべきこと、できることはまだ多くある。ただし、それに対応できる力をつけないといけない。

- ◆ ブレイクアウトルームでの討議（1回）：①講義で興味深かったこと ②講義への質問
- ◆ 質疑応答

4.4.5.3. 「指導案作成・教室活動・教授法について」

講師：建石 始 神戸女学院大学文学部 教授

日時：12月8日（火）9:30～12:05

目標：教育力強化

使用教材：建石先生作成のスライド

講義概要：

大阪日本語教育センターで行っている教育実習を例にして、「指導案作成」や「絵カードやゲーム集などを活用しての教室活動」、「教授法」等についての講義が行われた。また、日本語教育に役立つツールとして「日本語教育語彙表」「機能語用例文データベース『はごろも』」「日本語文章難易度判定システム」「日本語学習者作文評価システム」「基本動詞ハンドブック」「日本語読解学習支援システム「リーディング・チュウ太」「やさしにちチェッカー」「ふりがなをつけるサイト」等の実践講義が行われた。

- ◆ ブレイクアウトルームでの討議（1回）：どのようにして日本語教師になったか
- ◆ 質疑応答

4.4.5.4. 「日本で就職する留学生のために」

講師：栗原 由加 神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部 教授

日時：12月8日（火）13:15～15:50

目標：キャリア教育力強化

使用教材：栗原先生作成のスライド、補助資料

講義概要：

「企業が求める人材像」と「日本語教師や留学生が思う人材像」の乖離についての講義が行われた。「だいたいわかりますでは通用せず、完全にわからないと会社ではやっていけない」「留学生は特別という姿勢ではだめ」「楽しい授業ではなく、できるようになる授業が必要」「N2が最低レベルで、N1がゴールではない」等の日本語教師や留学生の意識改革が必要という講義であった。

進路指導（就職指導）の全体像、ビジネス日本語教育における要点に加えて、入社後に必要な電話対応やメモの取り方等の模擬授業が行われた。

- ◆ ブレイクアウトルームでの討議（1回）：留学生・外国人が日本企業に就職した時に、
職場で起こりそうなトラブルについて
- ◆ 質疑応答

4.4.5.5. 「日本の留学生受入れ施策と日本語教育」

講師：泉 博朗 泉行政書士事務所 所長

：岡部 敏明 岡部国際行政書士法人代表行政書士

日時：12月9日（水）9:30～12:05

目標：留学生施策に対する理解強化

使用教材：泉先生・岡部先生作成のスライド

講義概要：

「出入国管理」「在留資格の基礎知識」「外国人受け入れ施策の概要」「外国人技能実習制度の概要」「外国人の就職活動」「日本語教育機関、留学生数の増加」「資格外活動の許可」「ビザの種類と必要条件」「成績、出席率の大切さ」等について、具体例を挙げつつご自身の経験や実例に基づいた講義が行われた。

- ◆ ブレイクアウトルームでの討議（1回）：①講義で興味深かったこと ②講義への質問
- ◆ 質疑応答

4.4.5.6. 「障害のある留学生の支援－発達障害と合理的配慮を中心に」

講師：村田 淳 京都大学学生総合支援センター 准教授

日時：12月9日（水）13:15～15:50

目標：障害のある留学生に対する理解・支援強化

使用教材：村田先生作成のスライド、補助資料

講義概要：

「“障害”の現在」「大学における障害学生支援と障害者差別解消法」「発達障害のある学生への支援」に分けて、講義が行われた。障害とは何か、合理的配慮とは何か、発達障害のある学生、その支援の現状等について、詳細に解説され、日本語学校で教員が直面し、困っている対応のあり方について多くの示唆を得た。

- ◆ ブレイクアウトルームでの討議（1回）：①講義で興味深かったこと ②講義への質問
- ◆ 質疑応答

4.4.5.7. 「日本語コーパスデータの活用法について」

講師：建石 始 神戸女学院大学文学部 教授

日時：12月10日（木）9:30～12:05

目標：日本語コーパスデータの活用力強化

使用教材：建石先生作成のスライド、少納言、BCCWJ

講義概要：

「少納言」と「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」についての解説と、それらを使って語彙や表現を検索する実践講義であった。特に BCCWJ を使用する場合の詳細な条件設定や検索

データを Excel で整理する方法について実践した。様々な例文を作成したり、実例をさがしたりする場合に有効に使い、授業だけでなく、今後、論文を執筆する場合にも役に立つ。

- ◆ 質疑応答

4.4.5.8. 「日本語教師が知っておくべき著作権」

講師：増田 拓也 弁護士法人色川法律事務所 弁護士

日時：12月10日（木）13:15 ～ 15:50

目標：著作権に対する理解力強化

使用教材：増田先生作成のスライド

講義概要：

著作物・著作権とは何かについての講義であった。教育との関係で特に重要な行為である「複製（コピー・保存・録画・録音・印刷）・上演・上映・公衆送信等」等について講義があった。また、著作権について、日本語教師が理解しておくべき重要な情報について言及があった。たとえ、「フリー素材という名目で配布されている画像等であっても著作権が存在しないとは限らない」「著作権法 35 条による利用を検討する場合には、自分が所属する組織が著作権法 35 条の「教育機関」に該当するかどうか等を確認する必要がある」等々、著作物を扱うことが多い日本語教師にとって、使用の際はよく考えるように改めて注意が喚起される講義であった。

- ◆ ブレイクアウトルームでの討議（1回）：①講義で興味深かったこと ②講義への質問
- ◆ 質疑応答

4.4.5.9. 「事例研究：各々の学校現場で日々起こる事例から」

講師：大阪日本語教育センター教員（磯田郁子・川村光代・清水孝司）

日時：12月11日（金）9:30 ～ 12:05

目標：教師力強化

使用教材：作成した教材（事例集）とスライド

講義概要：

大阪日本語教育センターの現状と取り組みを発表した。さらに、研修生に事前に出してもらった事例をまとめたものを教材として使用した。研修生が日々直面している成功例や失敗例、困っている例について全体とブレイクアウトルームで質疑応答、議論、共有し、解決策を模索した。「日本語教育関係の事例」として、授業、進学、基礎科目、EJU、JLPT、教員間の研修等への対策、「日本語教育関係以外の事例」として、発達障害、異文化、教育制度の違い、出席状況等への対策が挙げられ、各グループで活発に意見や情報交換が行われた。事例は研修後に冊子にまとめて、共有教材として活用できるように研修生に送付する。

- ◆ ブレイクアウトルームでの討議（2回）：①日本語教育での事例 ②日本語教育以外の事例

4.4.5.10.「言語習得・言語理解・成績管理」

講師：森 篤嗣 京都外国語大学外国語学部 教授

日時：12月11日（金）13:15～15:50

目標：言語理解・実践力強化

使用教材：森先生作成のスライド、補助教材

講義概要：

「言語習得・言語理解」

第二言語習得、言語理解に関わる用語についてブレイクアウトルームで話し合った。用語としては知ってはいるものの、認識が曖昧だったり忘れてしまっているものも多いこと、実際に授業をする際に考慮できていないことを再認識した。また、実際に提示された文章を読むことを通して、言語理解や言語習得における話題提示の重要性やバイアス・先入観の影響について再認識する実践的な講義が行われた。

「成績管理」

エクセルを使って、成績管理を行うための実践的な講義が行われた。合計点、平均点、標準偏差、項目分析、正答率と識別力などを Excel で計算し、分析した。

- ◆ ブレイクアウトルームでの討議（2回）：①第二言語習得の用語について ②講義への質問
- ◆ 質疑応答

4.4.6. ブレイクアウトルーム

<目的>

他の学校・地域の研修生との意見交換やコミュニケーションによる気づきを促すため、多用した。

<回数>

集中講義中 11 回実施した。各講義につき、ほぼ 1 回か 2 回のブレイクアウトルームを実施した。

<ブレイクアウトルームの時間配分と役割分担>

- ①3人～4人（短時間で話しやすいため）
- ②各自自己紹介と司会、書記、タイムキーパー、発表者を決める。（5分）
- ③話し合う内容：①講義で興味深かったこと②講義への質問（15分）

書記は①と②を分けて word 等に記録して、ブレイクアウトルーム終了後、Zoom のチャットに貼り付けて全体に共有した。

- ④終了後、15分の全体質疑応答を行った。

<成果>

非常に活発に討議がされており、コミュニケーションがとれる貴重な時間であった。

<記録>

ブレイクアウトルームで出た質問等については記録し、担当講師に渡した。後日、担当講師から質問事項に対してフィードバックがあった。

4.4.7. チャットグループ

講義終了後、任意で他の研修生と自由に情報交換や交流ができるチャットグループ（ブレイクアウトルーム）を設定した。対面講義では名刺交換や情報交換や雑談等が自由にできるが、オンラインではそれが困難なため、オンラインの欠点を補うために設けた。集中講義の期間に3回設けた。参加者は情報交換や連絡先の交換を行っていた。

4.4.8. 日誌の提出

講義での気づき、学んだことを整理するために、各講義後、日誌を提出してもらった。提出はLeaf（リーフ）に直接書き込む形で行った。（7.3 参照）

4.4.9. アンケートの実施

集中講義終了後に、Leaf（リーフ）を利用して研修生にアンケートを行った。アンケート結果は全体的に非常に良いものであった。詳細については6.1 参照。

4.5. 事後課題とレポートの提出：気づきの確認・チャレンジへ

各講義の後、「各講義の先生からの事後課題」と「事後レポート」の提出をする。それにより、気づき、学んだことを確認、発展させ、より高いレベルへのチャレンジにつなげる。

4.5.1. 事後課題（各講師からの課題）作成

集中講義での学びをふまえて、各講義の先生からの以下の課題を作成する。それにより、講義の理解を深め、さらなる実践力、内省力を得ることを目標とした。

4.5.1.1. 「教育に活かすプレゼンテーション技術」の課題

講義で提示された授業のコツや考えについて、ご自身の立場で考えて「使えるもの」「使えないもの」に仕分けしてください。それぞれ、最低3項目ずつ挙げて、選んだ理由も記してください。

4.5.1.2. 「これからの日本語教育－技能別・目的別の教育－」の課題

技能別あるいは目的別の日本語教育では、それぞれの技能や目的によってこれまで行っていなかった教育が必要になったり、これまで行っていた教育が必要でなくなったりすると考えられます。そのような例を1つか2つ考えて、具体的に説明してください。例えば、「大学の講義を聞くための日本語教育」を考えた場合、具体的にどんな教育が必要になるのか、それは他の技能や他の目的の教育とどう違うのかということを例を挙げながら示してください。

4.5.1.3. 「指導案作成・教室活動・教授法について」の課題

講義の最後に紹介したツールについて、以下の点について現在担当している授業と関連させながら簡単にまとめてください。

- (1) どれが最も役立ちそうだったか
- (2) 実際の授業にどのように活用できそうだったか

4.5.1.4. 「日本で就職する留学生のために」の課題

ブレイクアウトルームで話し合った内容（留学生・外国人が日本企業に就職した時に、職場で起こりそうなトラブル5つ）について、日本語学校での解決策を考えてください。

4.5.1.5. 「日本の留学生受け入れ施策と日本語教育」の課題

1. 外国人材の受け入れ・共生のための総合的対応策として、国や自治体がどのような法律や施策、取り組みを定め実施しているかを調べ2つ書いてください。
2. 講義で提示した留学生に対する法律や施策、ビザ制度をふまえ、日本語教員として学習者に何をどのように指導しようと思うか、具体例を挙げて述べてください。

4.5.1.6. 「障害のある留学生の支援－発達障害と合理的配慮を中心に－」の課題

【留意点】を読んだ上で、以下の点について述べてください。

1. ご自身の学校において障害のある学生がいた場合の支援
 - 1-1. 個人モデルとしての選択肢
 - 1-2. 社会モデルとしての選択肢
2. 1の状況をふまえて考えられる改善点
3. 学校外で使えるような資源（支援機関や医療機関等）

【留意点】

- ・1については、個人モデル的な支援と社会モデル的な支援で分けて考えてみてください。箇条書きのような書き方でも構いません。また、現状では具体的な選択肢がない場合もあるかと思いますが、その場合は、想定される（今でも実施できそうな）支援の選択肢についてご検討ください。なお、ここでいう支援とは、必ずしも専門的なものではなく素朴なものでも構いません。
- ・2については、現時点でのご自身の考え方や理想像でも構いません。短期的な改善と長期的な改善に分けて考えていただくと、イメージしやすいかと思います。また、改善点だけを書くことが難しい場合は、改善するために課題になることもあわせて書いていただいても構いません。
- ・3については、箇条書きのような書き方でも構いません。ただし、それぞれの資源の大まかな役割は調べるようにしてください。なお、ここでいう資源とは公的なものに限りません。
- ・いずれの項目についてもご自身だけで考えていただく必要はありません。同僚の先生方とも対話

しながら取り組んでいただいても構いません。

4.5.1.7. 「日本語コーパスデータの活用法について」の課題

配布資料に書いてある文型表現・語彙について、[初級編] [中級編] [上級編]の中から一つ選び、コーパスを用いて調査、ランキング表の作成、比較・分析をしてください。また、余裕があれば、課題7にも取り組んでください。

[初級編] 課題1・課題2 [中級編] 課題3・課題4 [上級編] 課題5・課題6

※ 配布資料 (Word) あり

※ Word ファイルで提出のこと

4.5.1.8. 「日本語教師が知っておくべき著作権」の課題

ご自身が使用したことがあるフリー素材のウェブサイト、または講義で紹介したフリー素材のウェブサイトを閲覧して、利用規約を探して読んでください。そして、ご自身の日常業務でのイラストなどの素材の使い方が規約に沿ったものであったかどうか、検討し、その結果をまとめてください。

4.5.1.9. 「各々の学校現場で日々起こる事例から」の課題

1. 自分自身が長期の留学 (20 歳、周囲に日本人の少ない環境、語学レベル初級) をしていると仮定して、遭遇しうるトラブル、行き詰まるであろう場面、自身が陥りそうな状況を3～5つ挙げてください。そして、その時の自分の心情や、自分ならこう行動するだろうということを想像して書いてください。
2. 集中講義の内容、他の研修生とのディスカッション内容をふまえ、学習者に対する指導・対応の中で取り入れてみたいと思った方法や考え、対処法を挙げてください (どういった場面で有用と思われるかも合わせて書いてください)。内容は教育関係でもそれ以外でもかまいません。

※事前レポートの事例提出の際と同様に、ホームページ等でデータを公開することも想定していますので、個人が特定できるような情報は記入しないでください。ご記入いただいた先生方の学校名や名前は公開いたしません。

4.5.1.10. 「言語習得・言語理解・成績管理」の課題

[言語習得] 今回の研修で取り上げた項目 (講義 PPT スライド 2～3 「第二言語習得を復習しよう」) のうち、自身の教育実践の中で活かそうだと思った概念を取り上げ、具体的にどのように活かすのかを説明してください。

[言語理解] 今回の研修で体験していただいたように (講義 PPT スライド 4～12 「話題を見抜け～みどり幼稚園の S 先生」)、学習者の言語理解は語彙や文法の総和では計れない過程を経ています。

中上級日本語学習者の読解ストラテジーを培う学習指導（可能であれば自身のこれまでの実践、指導していなければ今後指導する場合の計画）を例に挙げ、どのような言語理解ができるようになることを目指すのか説明してください。

[成績管理] 配布データ『20201211 成績管理練習用.xlsx』の「課題」タブにあるデータを使って、下記の処理をしてください。

- (1) 「聴解」と「文字・語彙」の散布図を作成してください。
- (2) 5つの領域の相関係数を計算してください。
- (3) 「聴解」「作文」を1、「文字・語彙」「文法」を2、「読解」を3の比重で重みづけをして、50人を5つの成績順グループにクラス分けしてください。

※ 配布データ (Excel) あり

※ 「成績管理」は Excel ファイルで提出のこと

4.5.2. 課題提出状況

34名中32名が期限までに提出した（提出率94%）。年末年始の忙しい時期であったが、非常に真摯に課題に取り組んでいる研修生が多かった。講義内容を自己の業務や授業と関連付けて考え、日本語教師としての知識・技能・態度の深化に結びつくような記述が多く見受けられた。(7.4参照)

4.5.3. 課題のフィードバック

期限までに提出された課題は、課題ごとに取りまとめて講義担当講師にデータを送付した。そして、提出された課題について担当講師より、総評、または個別にフィードバックをしてもらった。担当講師からのフィードバックは、研修生に送付した。

4.5.4. 事後レポート作成

事後レポートの作成を通して、気づき、学んだことを整理し、さらに、今後の新たな取り組みに発展させることを目標とした。

4.5.4.1. 内容

① 研修で学んだこと（A4判1枚程度）

集中講義を通しての気づきをまとめる。

② 今後の日本語教育に対する抱負（A4判1枚程度）

集中講義での気づきを通して、新たな教育実践への取り組みをまとめる。

4.5.4.2. 提出状況

34名中32名が期限までに提出した（提出率94%）。提出されたレポートには、日本語教師に必要な知識や技術、人に対する謙虚な態度について見つめなおす良い機会になり、成長が感じられた

という声が多かった。また、今後の目標が見えはじめているものが多かった。(7.5 参照)

4.5.4.3. 研修生へのフィードバック

大阪日本語教育センターの教員よりフィードバック（講評・個別コメント）を行った。合わせて文化審議会国語分科会『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』の「留学生に対する日本教師【初任】に求められる資質・能力」の項目を研修生に送付し、その知識・技能・態度についての確認とさらなる向上を促した。

4.6. 事例集

事前レポートとして研修生から提出された日本語学校で日々起こる事例をまとめ、集中講義の中の事例研究の教材として使用した。事例を収集する際に、インターネット上または印刷物として公開することの可否について承諾を取り、その上で個人が特定されない記述にして作成した。印刷した事例集は研修後に研修生全員に郵送した。(7.1 参照)

4.7. 研修後アンケートの実施

事例集の送付に合わせて、研修後アンケートを実施した。アンケート結果は全体的に概ね良好であった。詳細については 6.2 参照。

4.8. 修了認定

受講生 34 名のうち 32 名が修了認定に必要な 72 単位以上を取得し、評価委員会で修了が認められた。単位が 72 時間に満たなかった 2 名は、業務上の理由で事後課題と事後レポートが未提出であったため、修了することができなかった。

修了が認められた 32 名には、大阪日本語教育センターより修了証明書を送付した。

5. 事業全体の評価

5. 事業全体の評価委員会

日本語学校初任日本語教員のためのスキルアップ研修の評価委員会を開催した。

5.1. 評価委員会の目的

研修生が研修前の状況から、研修を通して成長し、さらにチャレンジする目標と力を獲得できたかを評価するとともに、「日本語教育人材の養成・研修の在り方及び教育内容」「日本語教育人材の養成・研修における教育課程編成の目安」に沿ったものであったかを検証することで、研修自体の評価を行う。

5.2. メンバー

委員会メンバーは、実施検討委員会と同様に、学内の委員長と委員3名と学外委員1名、助言者7名で構成する。

	氏名	所属・職名
委員長	水落 いつみ	大阪日本語教育センター 副センター長
委員	清水 孝司	大阪日本語教育センター 教員
	磯田 郁子	大阪日本語教育センター 教務主幹
	川村 光代	大阪日本語教育センター 主幹補佐
学外委員	建石 始	神戸女学院大学文学部 教授
助言者	大島 武	東京工芸大学芸術学部 教授
	野田 尚史	国立国語研究所 教授
	栗原 由加	神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部 教授
	泉 博朗	泉行政書士事務所 所長
	村田 淳	京都大学学生総合支援センター 准教授
	増田 拓也	弁護士法人色川法律事務所 弁護士
	森 篤嗣	京都外国語大学外国語学部 教授

5.3. 期間

令和2年12月12日～令和3年3月19日

大阪日本語教育センターで開催する定例の対面での会議には学内の委員長と委員3名が参加した。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、学外委員やその他の助言者（研修の各講義担当講師）には来校を要請せず、基本的にZoomやメールでのやりとり等で会議を行った。その上で、令和3年3月9日（火）に学内委員と学外委員全員出席のもと総括としての評価委員会をZoomで行った。

5.4. 事業全体の評価の観点

- ① カリキュラム
- ② 研修生の取り組み
- ③ 作成教材
- ④ 運営・実施体制
- ⑤ 研修生アンケート

5.5. 事業全体の評価

5.5.1. カリキュラム

本研修では事前レポート、集中講義、事後課題と事後レポートという3つの柱が設定してあるが、文化審議会国語分科会『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』の「留学生に対する日本語教師【初任】研修における教育内容」と「留学生に対する日本語教師【初任】研修教育課程編成の目安」の内容に沿っていたと評価できる。

事前レポートでは、なぜ日本語教員の道を選んだかや、現在の業務、業務上の事例を問い、本人が経験を振り返り、内省を行うことで、現在の状況、立ち位置を自律的に把握することに重点が置かれている。集中講義では、初任日本語教師の研修に求められる教育内容についてトップレベルの講師の講義や他の教育機関の教員との議論を通して、初任日本語教員に求められる知識、技能、態度を成長させることができるように策定されている。事後課題と事後レポートでは、自分の成長に気がつき、さらに次の課題にチャレンジする人材育成が目指してある。よって、この3つの柱で組まれたカリキュラムが初任日本語教員に求められる資質・能力の向上に大きく寄与したと評価できると学内委員と学外委員出席の評価委員会で意見が一致した。

集中講義の時期に関しては、新型コロナウイルス感染拡大の状況から、12月上旬のZoomでのオンライン講義に変更を余儀なくされたが、12月は各日本語学校で通常授業に加えて、試験対策や進学指導がピークの時期であるため、実施時期としては良かったとは言えない。令和2年度については、入国待機していた留学生の授業開始日と重なり、研修辞退者もいた。諸事情を考えると、集中講義実施は、日本語学校が夏休みで比較的業務に支障なく集中講義に参加できる8月上旬が望ましいのではないかとと思われる。

集中講義の実施方法は、新型コロナウイルス感染拡大の状況から、対面からオンラインに変更した。オンラインでの研修を行ったことがなく、不安要素も多かったが、検討委員や助言者の方々から、オンラインでの講義の実施も可能であること、オンラインならではの利点等についていろいろ教えていただき、スムーズに実施できた。大きな要因として、Zoomでの講義に慣れている講師が多く、効果的な講義ができたことが挙げられる。また、ブレイクアウトルームを多用してディスカッションをしたことと、常にカメラをオンにして、顔を出していることをルールとしていたため、講師と研修生、研修生同士のコミュニケーションがよくとれたこともよい効果を生み出した。5日

間の講義期間中、緊張感のある中でも、和やかな雰囲気が保たれ、研修生同士の一体感が生まれていたことも、研修生の満足感が高かった一因であるだろう。新型コロナウイルス感染のリスクなく、全国各地からの研修生が一堂に会して、リアルタイムで講義を受け、議論しあうことができた。オンラインでも、工夫次第で対面の研修に劣らず、効果的に集中講義が実施できることがわかったのは大きな成果であると評価できる。

事前レポートや事後レポート、事後課題の内容については問題はなかったと思われるが、量については少し多かったかもしれない。特に、事後課題は講義ごとに課されるため研修生は10の課題を年末年始の期限があるなかで達成しなければならず、大変だったと推察できる。各講師のフィードバックのための期間も考慮しなければならないこともあり、十分な提出期限が設定できなかったことと、事後課題の全体としての量の調節が今後の課題と言える。

外部委員や助言者の方からも、「研修全体が適切で円滑に行えたと思う」「研修生は研修を通して大きく成長でき、今後の日本語教育人材の育成に貢献できる内容であった」「講師も研修生も互いにあまり慣れていないオンライン研修だったにもかかわらず、とてもうまくいったと思う」等の生の声が聞け、高い評価があった。

以上のように、事前レポート、集中講義、事後課題と事後レポートという3つの柱で設定された汎用性のあるカリキュラムが構築でき、それは「留学生に対する日本語教師【初任】研修」のカリキュラムとして成果があったと評価できる。

5.5.2. 研修生の取り組み

5.5.2.1. 集中講義への取り組み

オンラインでの講義であったが、全員がカメラをオンにした状態で講義に熱心に耳を傾け、質疑応答も活発であった。講義ごとに行ったブレイクアウトルームでの討議にも積極的に取り組み、互いによい刺激となっていた。

外部委員や助言者からも、研修生について、「非常に熱心に講義を聞いていて、講義終了後も質問が多かった」「ディスカッションを含めて能動的に参加していた」「熱心で、日本語教育業界の未来が明るく思えた」等の高い評価を得た。

研修生の集中講義への取り組みから、初任日本語教師に求められる知識・技能・態度が向上できる研修であったと評価できる。

5.5.2.2. 提出課題への取り組み

自己分析がきちんとされており、今回の研修から得たものや今後身につけなければならないものがよく理解されていた。提出された成果物から非常に熱心に取り組んだことがわかり、今後の目標も見えてきている様子が窺える。レポートや事後課題等の提出は決して容易ではなかっただろうが、真摯に取り組んだ研修生は大きなレベルアップが期待できる。

事後レポートでは、研修生から自分の勉強不足に気づかされた、思ったより幅広い範囲の学びが

あった、全国の別の日本語教師と苦労が共有できたという声が数多く出ていた。自己の内省や成長の気づきがあり、研修生にとって有意義な研修であったことが伺える。

外部委員や助言者からも、研修生の課題について、「研修生は学生とは異なり、現場で教えている先生方なので、ポイントを押さえた形での取り組み方だったと思う」「非常に熱心に取り組んでもらえたのがよくわかる」等の声が寄せられた。

5.5.3. 作成教材

事例集はこれまでにない現場の生の声が収集されたデータ集になっている。これを見ると、現場がどのような成功や失敗を重ね、日々努力しているかがわかるようになっている。

また、大変タイムリーな事例から長年問題になってきたこと、オンライン授業のやり方や発達障害の学生への対応、異文化トラブルなど幅広く掲載されている。

その事例の範囲は、留学生に対する教育のための知識、技能、態度の領域に及んでいる。ICTを使う知識や進学・就職指導に必要な知識、言語指導のための知識等、日本語教師にとって必要な知識に関わる事例、また、教室内外での活動のための技能や指導方法等に関わる事例、さらに、学生や同僚とのコミュニケーションや信頼関係、異なる文化に対する態度等に関する事例も収集されている。

以上のように、作成された事例集は、今までにないデータ集として、日本語学校の教員が連携して問題解決をするための教材として評価できる。

ただ、課題としては、客観性を持たせるためには、より多くの事例が必要であることと、よりわかりやすく役に立つ分類を模索する必要があるだろう。また、可能ならば、解決策の例がある程度示されることが望ましい。今回は集中講義の際に提示し、議論の教材として役立てたが、事前に研修生に渡せるだけの時間的余裕があれば、より深い議論ができたのではないかと思われる。

5.5.4. 運営・実施体制

運営・実施体制については、新型コロナウイルス感染拡大の影響のための集中講義の時期の延期や、対面講義方法からオンライン講義方法への変更等で、混乱した部分も多かったが、概ね問題なくできたと評価できる。

研修生の募集や研修生との情報や資料のやり取り、研修生からのレポートや課題の収集等、Leaf(リーフ)を使って一元化して行えた。

学外委員や助言者とは、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、主にZoomとメールでのやり取りを行ったが、対面でのやり取りに比べて非常に時間がかかった。事前の打ち合わせや準備において対面とは別の細かさが要求されることに気がついたのも成果の1つと言えよう。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で様々な対処が必要な中で通常業務自体も混乱し、その中で非常に大きな事業を効果的に実施するには、より多くの人員と時間が必要である。

5.5.5. 研修生アンケート

集中講義終了時アンケート、研修終了時のアンケートの結果、コメント等から本研修に対する満足度は高かったと言える。

5.6. 総評

5.6.1. 成果

以下の5つの観点から本研修について評価を行った。

①カリキュラム ②研修生の取り組み ③作成教材 ④ 運営・実施体制 ⑤研修生アンケート

そして、学内委員と学外委員全員出席の評価委員会において、『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』で示されている「日本語教育人材の養成・研修の在り方及び教育内容」「日本語教育人材の養成・研修における教育課程編成の目安」に沿ったものであり、「留学生に対する日本語教師【初任】に求められる資質・能力」が向上する研修であったとの意見で一致した。

5.6.2. 今後の課題

今後の課題としては以下のようなものが考えられる。

- ① 集中講義ではZoomのみ使用したが、講師や研修生同士がスムーズに意見交換や議論ができるようパドレット等の別のソフトも併用すれば、講義中のコミュニケーションや理解をより円滑にし、一層効果的なオンライン研修ができたと思われる。
- ② 新型コロナウイルス感染拡大とオンラインへの形式変更に伴う準備のため、12月に集中講義を移動させたが、授業や業務上の理由で受講を辞退する研修生がいた。時期としては当初計画していた8月が望ましい。
- ③ 集中講義の日程と方式（オンライン）を急に変更せざるをえなかったため、講師の変更を余儀なくされた。また、新型コロナウイルス感染状況の予測が困難だったため、その対応で多忙を極め、準備不足な側面もあった。よりよい研修を実施するためには十分な準備期間が必要である。
- ④ 集中講義後の事後レポートと事後課題がかなりの分量であった。研修生は真摯に取り組み成長が窺えたが、研修生には負担が大きかったように思う。今後、どの程度の課題がちょうどいいかは見極める必要がある。
- ⑤ 文化審議会国語分科会『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』の「留学生に対する日本語教師【初任】に求められる資質・能力」について、研修が始まるまでに研修生に対して、研修内容との関連づけを明確に示しておいたほうが、より効果的な成長に繋がったと思われる。
- ⑥ 集中講義の期間を5日間としたが、教育内容をさらに補うために、日程を増やすことも検討する必要がある。

5.6.3. 令和3年度事業への応募について

本研修の集中講義は、当初は令和2年8月3日（月）から8月7日（金）までの予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、12月7日（月）から12月11日（金）までに日程変更を余儀なくされた。それに伴い、研修生の事後レポートと事後課題の提出期限が令和3年1月末となり、それに対する各講師からのフィードバックも令和3年2月末と遅い時期となった。結果的に事業の評価・分析が年度末までになり、報告書の最終提出も4月末にずれ込んだ。

本研修の集中講義は、日本語学校の授業がなく業務に余裕がある8月が適当であるが、そのための準備期間が十分にとれないことが懸念される。令和2年度研修では1月から各講師の配置や依頼を始めており、8月実施を目標とした場合、時間的な制約で効果的な研修の実施が困難であるという結論に至った。よって、令和3年度事業への応募をやむなく断念することとした。

6. アンケート結果

6. アンケート

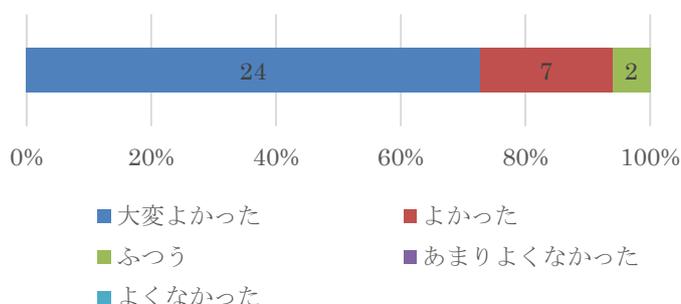
集中講義後と全研修終了後に研修生にアンケートをとった。集中講義後のアンケートはLeaf（リーフ）のアンケート機能を使用して実施、34名中33名から回答があった。全研修終了後のアンケートはオンライン調査システム（J-LINEs）を使用して実施、34名中21名から回答があった。なお、意見・感想は一部のみ抜粋している。

6.1. 集中講義後のアンケート

6.1.1. 5日間の集中講義について

6.1.1.1. 5日間の集中講義はどうでしたか。

大変よかった	24
よかった	7
ふつう	2
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



6.1.1.2. コメント（任意）

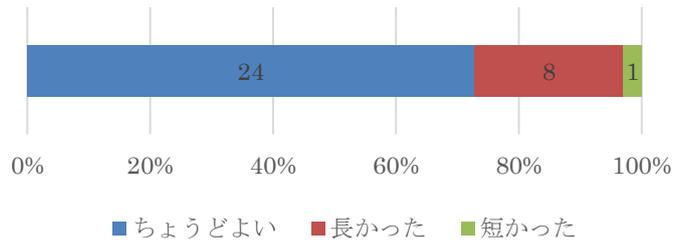
以下、コメントの抜粋

- 各先生方の講義が短時間の中であっても、非常に充実した内容で大変ありがたかったです。また、運営されている事務局の先生方にも深く感謝いたします。できれば、第2回をしていただけると嬉しいです。
- オンライン研修ということで、普段とは違った環境のなか開催をしてくださったことは本当にありがたかったです。
- 各分野の専門の先生からお話が聞くことができ大変勉強になりました。また、直接先生方に質問をすることもでき、大変有意義な講義ばかりでした。
- 非常に勉強になりました。知らないことばかりで毎日ドキドキワクワクしながら講義を受講しておりました。また、普段はお会いできない先生方にお会いでき、とても刺激になりました。北は岩手県から南は沖縄県までオンラインならではの貴重な経験もさせていただきました。みなさまには感謝申し上げます。

6.1.2. 集中講義の時間について

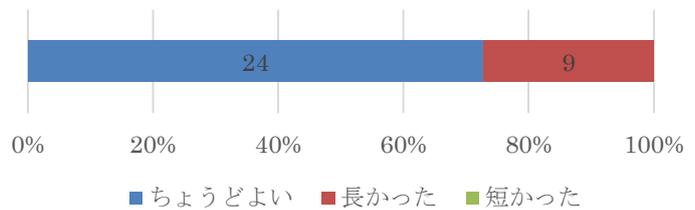
6.1.2.1. 研修期間（5日間）

ちょうどよい	24
長かった	8
短かった	1



6.1.2.2. 一日の研修時間

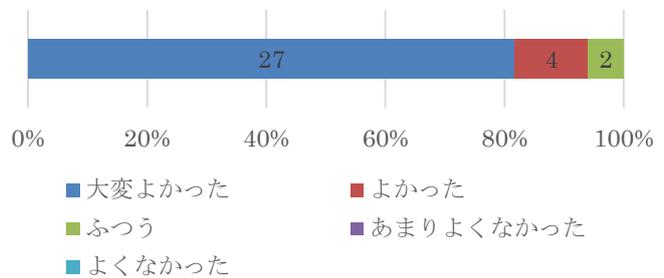
ちょうどよい	24
長かった	9
短かった	0



6.1.3. 個別の講義について

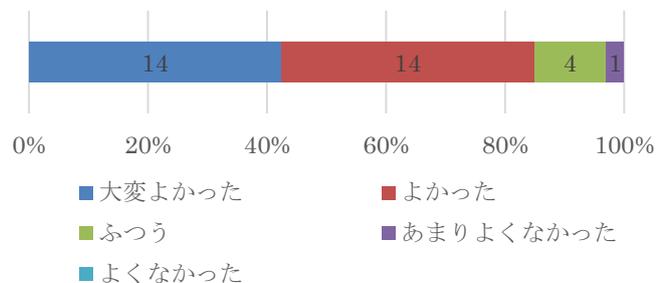
6.1.3.1. [12/7 月 午前] 大島先生「教育に活かすプレゼンテーション技術」

大変よかった	27
よかった	4
ふつう	2
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



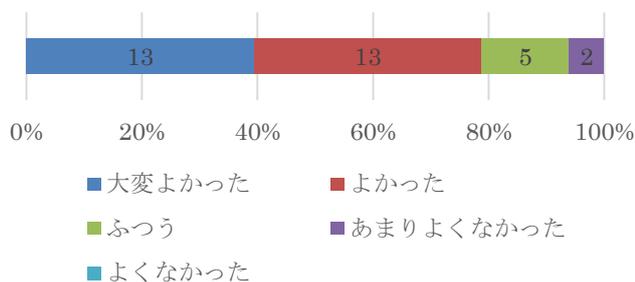
6.1.3.2. [12/7 月 午前] 野田先生「これからの日本語教育—技能別・目的別の教育—」

大変よかった	14
よかった	14
ふつう	4
あまりよくなかった	1
よくなかった	0



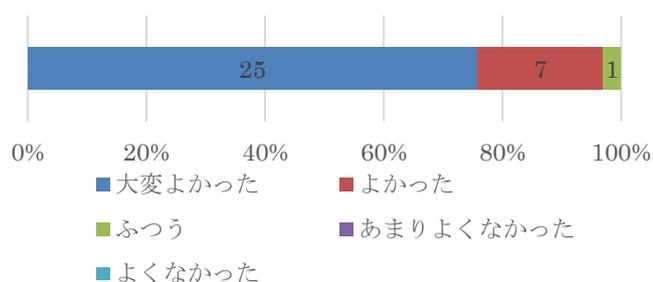
6.1.3.3. [12/8 火 午前] 建石先生「指導案作成・教室活動・教授法について」

大変よかった	13
よかった	13
ふつう	5
あまりよくなかった	2
よくなかった	0



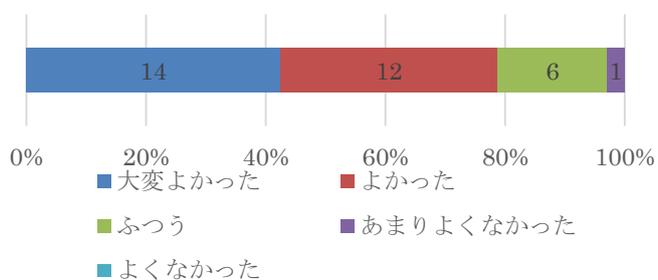
6.1.3.4. [12/8 火 午後] 栗原先生「日本で就職する留学生のために」

大変よかった	25
よかった	7
ふつう	1
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



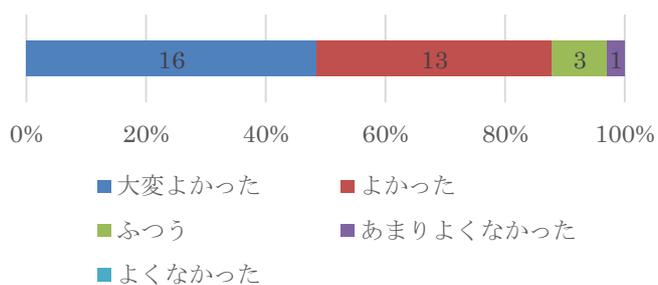
6.1.3.5. [12/9 水 午前] 泉先生「日本の留学生受入れ施策と日本語教育」

大変よかった	14
よかった	12
ふつう	6
あまりよくなかった	1
よくなかった	0



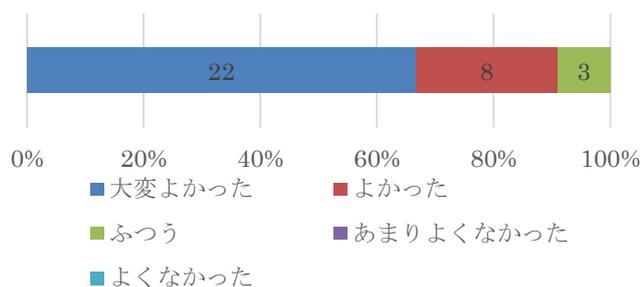
6.1.3.6. [12/9 水 午後] 村田先生「障害のある留学生の支援—発達障害と合理的配慮を中心に」

大変よかった	16
よかった	13
ふつう	3
あまりよくなかった	1
よくなかった	0



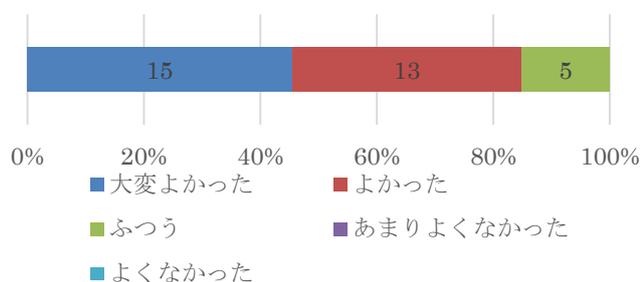
6.1.3.7. [12/10 木 午前] 建石先生「日本語コーパスデータの活用法について」

大変よかった	22
よかった	8
ふつう	3
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



6.1.3.8. [12/10 木 午後] 増田先生「日本語教師が知っておくべき著作権」

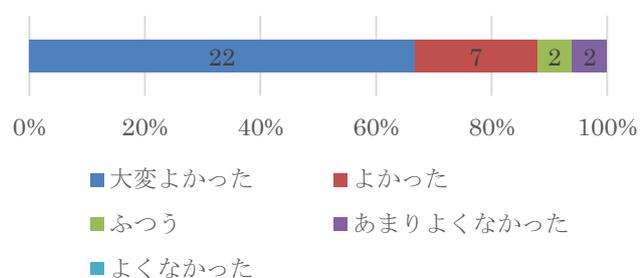
大変よかった	15
よかった	13
ふつう	5
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



6.1.3.9. [12/11 金 午前] 大阪日本語教育センター

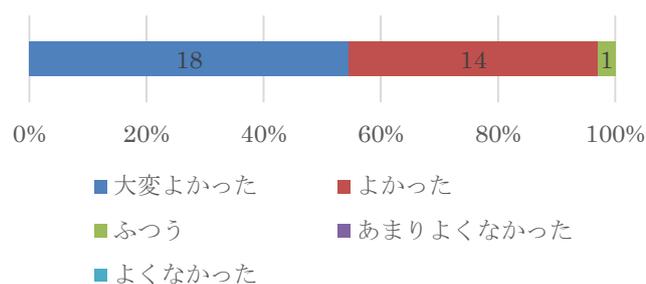
「事例研究：各々の学校現場で日々起こる事例から」

大変よかった	22
よかった	7
ふつう	2
あまりよくなかった	2
よくなかった	0



6.1.3.10. [12/11 金 午後] 森先生「言語習得・言語理解・成績管理」

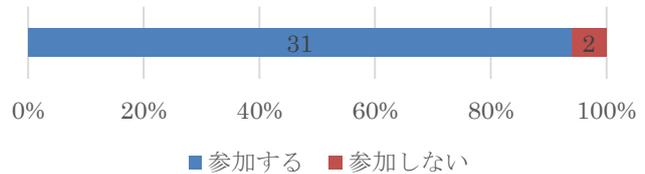
大変よかった	18
よかった	14
ふつう	1
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



6.1.4. 研修について

6.1.4.1. 今後このような研修があればまた参加しますか。

参加する	31
参加しない	2



6.1.4.2. もっと知りたい分野や興味がある分野があれば書いてください。(任意)

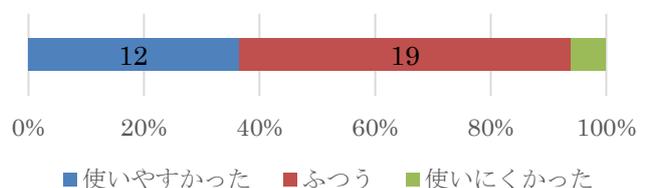
以下、コメントの抜粋

- オンライン授業の模擬授業が見てみたい。
- テストの作り方やおすすめ教材が知りたい。(他の学校がどんな教材でどう活用しているのか)
- 中級や上級の授業について学びたい。
- 「話す・聞く・読む・書く」などの技能別の教授法や教室活動について、さらに詳しく学びたいと思いました。
- 新任講師・非常勤講師に対する指導法などを知りたいです。中堅講師の研修等がございましたらぜひ参加させていただきたいと思います。
- もっと発達障害について深く知りたいです。実際の事例などを紹介していただいて、解決法をグループワークで考える、というような機会があれば、ぜひ参加してみたいです。
- 各現場で起きた事例の解決法をもっと知りたかったです。

6.1.5. その他

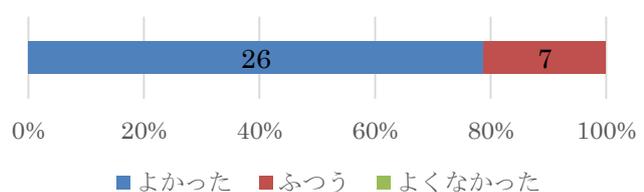
6.1.5.1. 研修管理システム (Leaf) の使用

使いやすかった	12
ふつう	19
使いにくかった	2



6.1.5.2. 事務局の対応

よかった	26
ふつう	7
よくなかった	0



6.1.5.3. ご意見ご感想がありましたら書いてください。

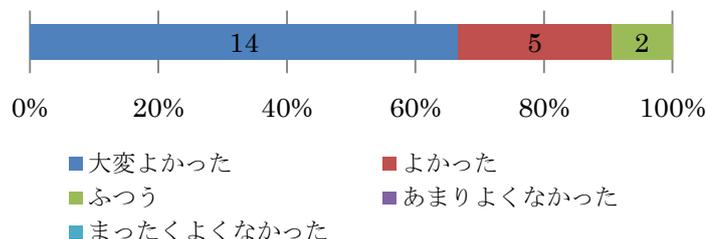
以下、コメントの抜粋

- 養成課程以来、こういった研修の機会はなかなか持てないので今回参加できてよかった。経験の異なる先生方と情報や意見を交換し合えたことも、自分のスキルを伸ばすいい機会になった。ぜひコロナが収束した際には、実際に顔を合わせて、模擬授業や教材研究を行う機会があればと思っている。
- ここで集まったメンバーが、五年後、十年後に勤務校の中核、日本語教育の中堅を担っていくのだと思うと、おもしろそうだなと感じることができました。勤務校では上下の関係はあるのですが横の同僚は少なく、教育も方針や個別の事情、学校の歴史などが絡んでくるため、日本語教育という専門的な分野だけを見てやっていくことはできません。しかし、研修に集まったメンバーはそういったしがらみから離れ、率直に意見を交換し、今の状況を良くしようとしていたし、他校の現場事情から学んで自分の仕事に活かそうとしているように見えました。学校を越えて、現場を変えていこうという挑戦的な雰囲気を感じられたことは、まだ自分にもできることがあるはずだという気持ちを高めることにつながりました。おかげさまで他校の方とのつながりもできて、さらに「オンラインでも集まれる」という意識がついている状態です。大切にしていきたいと思います。本当なら、来年もこのような研修があれば参加したいのですが、内容の充実度を考えると、経験の浅い後輩に譲ってあげたい思いもあります。とはいえ、まだまだ私も学びたいことがたくさんありますから、研修のご案内があれば積極的に手を挙げていくつもりです。スタッフの皆様の ZOOM の使い方等々も参考になりました。貴重な機会をありがとうございました。【追記】のびのびと自分らしく受けられた研修だったと感じています。一緒に受けられたみなさんもそうであればいいのですが。
- 大変貴重な研修でした。本当にありがとうございました。毎日の交流の場もあり、話しやすい雰囲気でした。普段お会いできない学校の先生方と知り合うこともでき、オンラインだからこそできる研修だったと思います。今後もこのような研修があればぜひ参加したいと思います。

6.2. 全研修終了後のアンケート

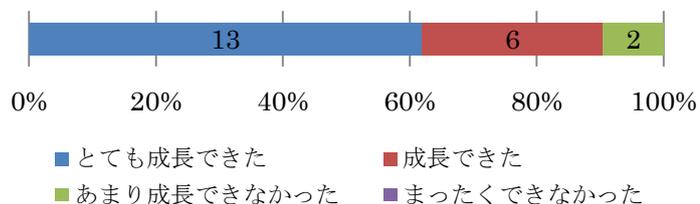
6.2.1. 研修はどうでしたか。

大変よかった	14
よかった	5
ふつう	2
あまりよくなかった	0
まったくよくなかった	0



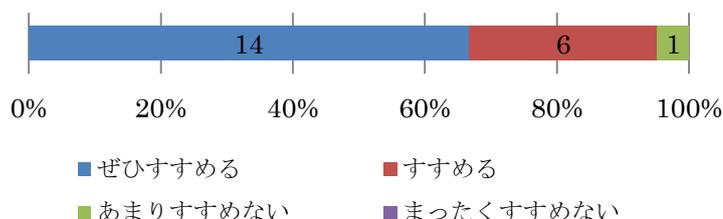
6.2.2. 研修全体（事前レポート、集中講義、事後レポート、課題）を通して、成長できたと思いますか。

とても成長できた	13
成長できた	6
あまり成長できなかった	2
まったくできなかった	0



6.2.3. もし、今後このような研修があれば、ほかの日本語教員にも受講をすすめますか。

ぜひすすめる	14
すすめる	6
あまりすすめない	1
まったくすすめない	0



6.2.4. ご意見・ご感想があればご記入ください。

以下、コメントの抜粋

- 非常に有意義な研修でした。同僚とも共有をし、学校全体で取り組めることは進めて行こうという話になりました。今後もこのような研修があればぜひ参加させていただきたいと思っています。
- 自分の知らない知識、それから、知っていて使えていなかった知識などを知ることができて、とてもよかった。自分自身もっと勉強していく必要があると感じた。
- 新型コロナウイルスが流行した為に直接講義を聞けず、受講生の方や先生方ともお会いできなかったのが本当に残念でした。またこのような機会を是非作って頂きたいです。

- 錚々たる講師陣に対して、とてもわかりやすいコーディネート。感謝いたします。やっと1年日本語教師として経験することができました。これからも頑張っていける覚悟ができました。ありがとうございました。
- 大変勉強になりました。以前、職場全体で東京で研修を受けたことがあるのですが、その当時は教師になったばかりで知識も経験も浅く、正直よく理解できませんでした。初めての研修がそのような感じだったので、研修に対してあまりいいイメージを持っていなかったのですが、今回の初任者研修は様々な分野を学ぶことができ、全国の日本語教師の方と繋がることができ本当に良かったです。また機会があれば、ぜひ参加させていただきたいです。ありがとうございました。
- また機会があれば、参加したいです。続編として、してほしい内容は以下の通りです。今回の研修で挙げた頻出事例を解決するために、法的アプローチ・日本語レベル別アプローチ・国別アプローチなど様々な角度から方策を考えてみたいです。
- 業務に押されて課題を出すことができませんでした。ごめんなさい。
- 研修で学んだ知識を講師会議で共有しました。
- 非常に充実した研修で深く感謝申し上げます。ただ、残念なことに私事で研修終了後の提出ができず、誠にお恥ずかしい限りです。せっかく講義してくださった先生方に申し訳ないことでした。
- 非常に実りの多い、充実した時間をありがとうございました。
- 大変ためになりました。また機会がありましたら研修を受けたいと思いました。
- とても有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
- 研修が終わり業務に戻って感じましたことですが、各講義で多くのご指導をいただきましたことが現実の場でとても役に立っています。小生の場合、直接学生指導に反映させるというよりも、各教員に対する見方の「引き出し」が増えたという要素が多く、「え、初任でもやるのがこの教員欠けてるな」といった具合です。十分に理解できなかった講義は、今後時間を見ながら振り返っていこうと思います。いずれにしても、大阪日本語教育センターの皆様には本当にお世話になりましたことを御礼申し上げます。
- 研修の時期は、授業や進学指導の業務が立て込んでいない時が望ましいと思います。例えば、5月から8月ぐらいが最適ではないでしょうか。12月は、負担が大きいと思います。
- 第一線で活躍されている方が講義をされているので大変素晴らしい内容でした。知的好奇心を掻き立てられる有意義な時間を過ごす事ができました。

7. 研修資料

7. 研修資料

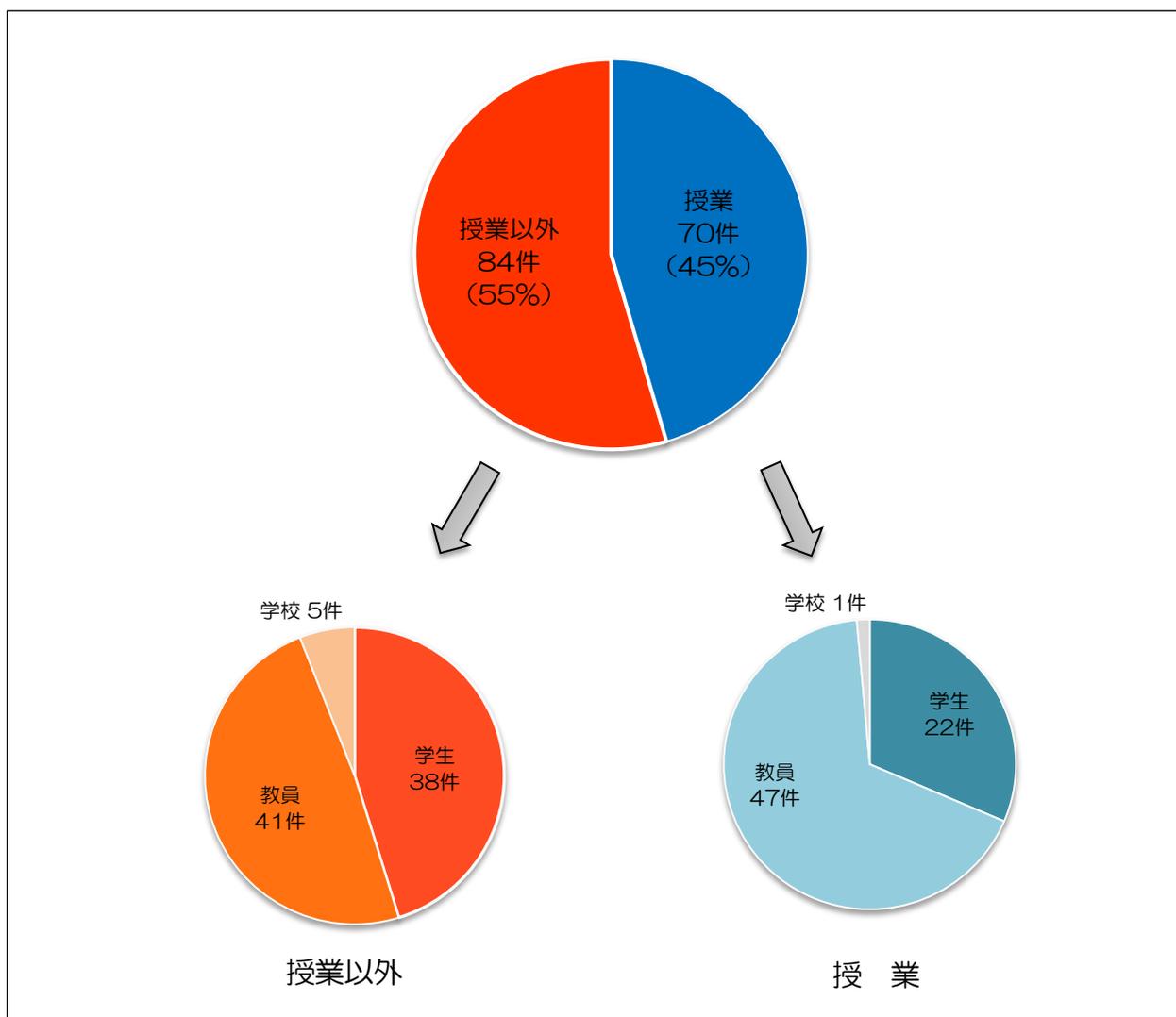
研修中に作成された「開発教材（事例集）」「事前レポート」「日誌」「事後課題」「事後レポート」から抜粋して例として掲載する。

7.1. 開発教材（事例集）

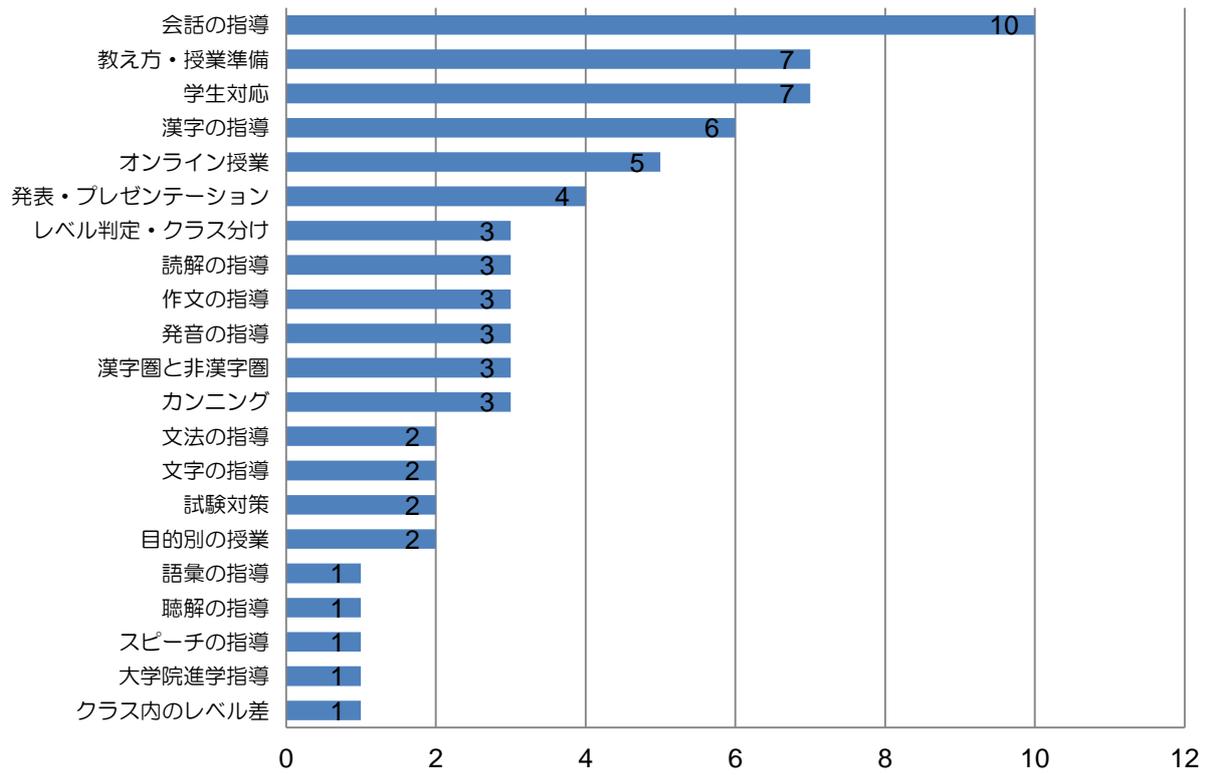
7.1.1. 概要

研修生からの事例154件を授業関係のものと授業関係以外のものの二つに分類した。名前は「授業」「授業以外」とした。それが以下の表の大分類である。「授業」は70件、「授業以外」は84件となる。そのおのおのを学生関係のもの、教員関係のもの、学校関係のものに分けたのが、その下に矢印で示したグラフである。

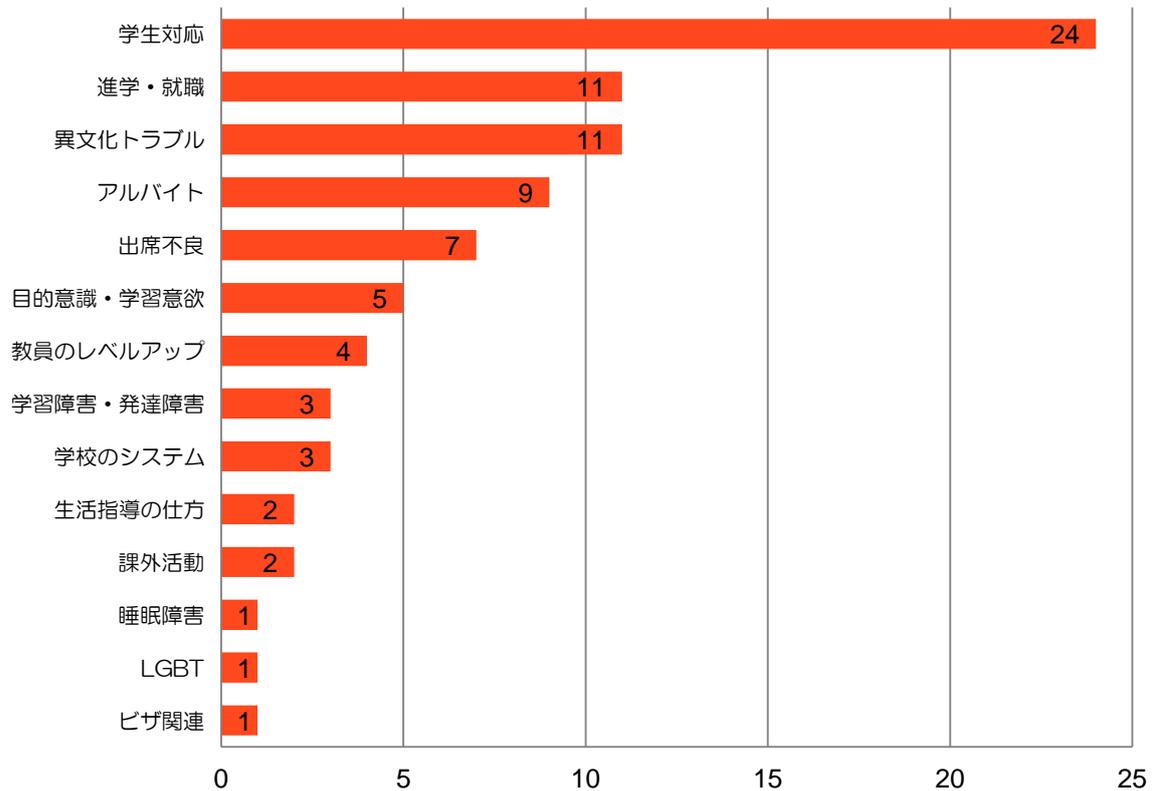
その次のグラフは、「授業」と「授業以外」を項目別に分類したものである。「授業」は21分類、「授業以外」は14分類とした。グラフ上の数字は提出された事例の件数である。



グラフ2 授業 小分類



グラフ3 授業以外 小分類



7.1.2. 事例抜粋

教え方・授業準備 7件

授 業 70件

まだ授業の経験が浅いため、授業ごとに教案を作ることになっているのだが、授業が終わった後、振り返りの時間がなかなか取れずにいた。しかし、少しでも振り返りをする必要があると思い、授業の後、その教案(Word)の中に、自分の思ったことや上手くいかなかったことを一行でも書き込むようにした。後日、同じ内容の箇所が担当になった際、その書き込みを見て、授業を少し改善することができた。初任の段階では時間をかけて振り返りをするのが大切だとは思いますが、もし時間が無くても、一行でも書くことに意味があると感じた。

オンライン授業 5件

授 業 70件

緊急事態宣言が出されるまえに今後遠隔授業が行われることを予想し、遠隔用のツールや方法をインターネットや Facebook 上で調査し、学習者にも協力を仰ぎ遠隔授業用のツールを使っていた。その結果、比較的スムーズに遠隔授業へ移行することができた。

読解の指導 3件

授 業 70件

授業中落ち着きがない学習者が、多読の授業では驚くほど集中している。読むという行為が好きな学習者が、自分の読めるレベルの本だと試験対策の読解授業よりも熱中しているように思う。

文法の指導 2件

授 業 70件

文法の違いを質問してきた学生に細かく文法の違いを説明してしまい、それを聞いた学生が首をかしげるのを見ると、余計に説明してしまい、結局、説明地獄に陥ってしまう。

試験対策 2件

授 業 70件

JLPT の申込みが近づくと、それぞれの学生に合ったレベルの受験を促すが、どうしても自己レベル以上の級を受験したがる学生が国籍を問わず多い。卒業までに数回受験のチャンスがある学生なら、最初はチャレンジングで受験させることはあるが、ラストチャンス学生には確実に合格できる級を受けてほしいと思うが、「それなら受けない」と受験をしない留学生もいて困っている。

クラス内のレベル差 1件

授 業 70件

同じ教室にレベルの違う学生が存在する時、どちらのレベルに合わせたらよいのか今でもわからない。一番良いのはクラスを分けることではあるが、運営上そうもいかない時がほとんどなので、退屈そうな学生または完全に取残される学生がいるのを少しでも緩和したいが、まだ解決策が浮かばない。

学生対応 24件

授業以外 84件

授業中によく寝る学生を呼び出し、なぜ寝てしまうのか聞いたところ、アルバイトが忙しくて寝不足だといった。自分も学生時代のころを思い出し、その気持ちがわかるので厳しく注意できなかった。生活指導の先生と相談し、留学生は勉強することが前提で、出席率や学習態度の評価は一生ついてまわることを知り、学生に説得力のある指導ができるようになった。

進学・就職 11件

授業以外 84件

1年目の進路指導は、出願させることで頭がいっぱいで、金銭計画の指導まで至らなかったため、スリランカの学生1名が、授業料が払えないために合格取り消しになってしまった。その後、金銭計画でどこまで介入するかを線引きをきちんと定め、教員で共有、共通認識を持ち、進路指導の中に金銭計画が含まれることを再認識し、フローにくわえた。

アルバイト 9件

授業以外 84件

時給の高い深夜アルバイトにより、学習意欲が欠如している学生が少なくない。生活に追われる中で、当初の留学目的が薄れていく。非常勤講師ではあったが、卒業後の進路について情報を得るように心がけ、学生に数年先を考えさせられるようにしていた。

教員のレベルアップ 4件

授業以外 84件

日本語教師間の勉強会の時間が取れず、教師の質があがらない。みなさんの学校ではどのようにされているのだろうか。常勤講師は教務外雑務などにも時間をとられる。非常勤は時間効率を考えると時給が発生しない場合、勉強会に進んで参加しない。前任校では養成講座講師の先生が来校してくださり、年1回勉強会を行っていたが、やはり非常勤講師の集まりが悪かった。

課外活動 2件

授業以外 84件

日本語学科の一泊二日の研修旅行を通して、学生同士、学生と教員、学生と地域住民の方とのコミュニケーションが取れて、企画してよかったと感じた。

7.2. 事前レポート 提出物

事前レポートとして研修生より提出されたものの中から、以下にいくつか抜粋する。

7.2.1. 日本語教育を志した理由

- (抜粋) 日本語教師を志した一番の理由は、将来開発途上国で働くためです。高校生頃の頃、アルバイト先の食料廃棄物の多さを目の当たりにしてから、開発途上国の生活や問題に興味を持つようになりました。その後途上国について勉強していくうちに、いつか現地で働きながらその国の人々と触れ合いたいと思うようになりました。そこで、日本語教師なら技能実習生の送り出し機関などで働けるのではないかと考えました。外国で働くなら日本語教師だけではなく他にも営業職など様々な職種がありますが、自分自身外国語の学習に興味があったので言葉の仕事を選びました。
- (抜粋) 初めて日本語文法の授業を受けたとき、衝撃を受けました。担当している教授の授業では、二義文の意味を考えてくるという宿題が毎週ありました。先生の出す宿題に答えられないのが悔しくて、考えているうちにどんどん日本語教育に魅力を感じてきました。そして、日本語教育に興味を持ちました。(中略) 最初は、大学の教授に「日本語教師は高校教諭に比べて、給料も少ないし、〇〇さんにとっていいことはないと思うよ。中途半端な気持ちでやりたいというなら、おすすめはしないよ。」と反対されたこともありました。しかし、私の本気度を見て、教授も応援してくれるようになりました。私が日本語教師になってからも、時々連絡を取っていて、あの時の決断は間違っていなかったと思うくださっています。私は今、日本語教師として働くことができ本当に良かったと思っています。
- (抜粋) 長年働いてきた公立小学校を2020年3月末日に定年をむかえることになっていました。定年を機に、心機一転して新しいことへ挑戦しようと思い、日本語教育の世界に足を踏み入れました。現役の時、ある日本語学校と連携し、小学生たちと留学生たちとの総合的な学習の授業を組んだことで、日本語教育への興味・関心を持つことができたからです。

7.2.2. 現在の「業務内容」と「業務について努力している部分」について

- (抜粋) 一番私が業務を行うに当たって努力していることは、シンプルですが、毎日元気で明るく温かい先生でいることです。当たり前のことですが、初任の私に出来ることのひとつだと思います。色んな不安や心配事がある留学生達が些細なことでも相談出来るような関係でいたいと思います。学生が悩んでいる時は一緒に悩み、喜んでいる時は一緒に喜び、一喜一憂を出来るだけ共に分かち合いたいと思っています。毎日が学びであり、学生と一緒に成長していくことを大切にしていきたいです。
- (抜粋) 授業内で努力している部分は、学生とのコミュニケーションを意識することです。学生ひとりひとりの顔を見ながら、学習面だけでなく生活面や金銭面の悩みについても相談に乗るなど、学生が勉強に集中できるような環境づくりを心がけています。現在担当しているクラスでは、クラ

ス内の学力差が大きいと、学力上位層・学力下位層のどちらも満足できる授業にするため、追加課題を与える、補習を行う、という取り組みもしております。

- (抜粋) 信頼関係を築くには、良い授業をすることが一番だと肝に銘じています。そのため授業準備を十分におこない、その場しのぎの内容にならないよう心がけていますが、いくら準備をしても、伝わらないことがあると心が折れてしまいます。だからといって手を抜くと、必ず学習者に見抜かれてしまうので、せっかく築き上げてきた信頼関係を崩さないよう全力を尽くしています。良好な関係は築くのは大変ですが、壊れるのは一瞬なので本当に注意しています。
- (抜粋) 12月の日本語能力試験でN3の合格を目指すクラスとN2の合格を目指すクラスの授業を担当しています。N3の合格を目指すクラスでは、主に語彙と文法を教えています。語彙の授業では、「クイズレット」という語彙学習アプリを利用し、語彙の定着を図っています。このアプリは学生にも大変好評で、グループや個人で対戦できるゲームの機能があり、学生たちもとても白熱して、ゲームに取り組んでいます。N3の文法の授業については、なるべく必要最小限の情報で教えるように心がけています。N3クラスでは、勉強が苦手な学生もいるため、授業中に集中力が続かないことがあります。やる気を失わせないために、クラス全体では簡単な練習問題を用意しています。余裕がある学生には追加の問題を毎回用意して、日本語のレベル差に配慮しています。

7.2.3. 所属している日本語学校での使用教材や教授法、学生の特性等について

- (抜粋) 授業開始から約半年後より多読授業を開始。1コマ90分の中で45～60分を使用。「レベル別日本語多読ライブラリー」「にほんご多読ボックス」を主に使用している。初回は多読について説明し、読み方を確認。2回目以降は自分で好きな本を選び、読む時間をとる。教師はあまり口を出さず、時折学習者に本の内容について聞いたり、読んでいる本の傾向からおすすめの1冊を選ぶ。本を読んだ後は毎回読書記録に記入。1年で平均40冊ほどの本を読んでいる。数か月に1度、おすすめの本を学習者に選出させ、まとめたものを冊子にしたり、ペアで相手に読んでほしい本を紹介し合ったりする。
- (抜粋) フォーカスオンフォームで場面にあった会話ができる練習やグループワークをし学生主体で勉強を進めています。試験は、ペーパーテストではなく発表をさせています。
- (抜粋) 進学希望の学生が多いことや、ほかにも様々な学習ニーズをくみ取り、毎週金曜日に「選択授業」と称してJLPT対策や、書き方、話し方、日本事情などの授業を受けられるようにしています。学生は3か月ごとに受けたい授業の希望を出し、受講します。対策授業では、問題の解き方や模擬試験など、試験対策に特化しており、普段の活動中心の授業とは打って変わった授業になります。このように、授業内でしっかりメリハリをつけながら、授業を行っています。

7.3. 日誌 提出物

日誌として研修生より提出されたものの中から、以下にいくつか抜粋する。

7.3.1. [日誌] 12月7日(月) 午前 大島先生の講義

大島先生の講義そのものから、プレゼンテーションの技術を感じる場面が多々あり、大変勉強になった。特に、お話の中での「話し手は、自分が知っていることを話すのだが、聞き手は、知らないことを聞くのである」というお言葉が印象に残った。プレゼンテーションは、普通の会話と同様で、相手への思いやりが欠かせないものなのだとの再認識できた。そして、この事実を念頭に置いて、授業づくりをしなければならぬと感じた。最後に先生は、「プレゼンの腕を上げるには、スポーツと同様で、練習が大切だ。」とおっしゃられた。今回のご講義内容を意識し、私も日々練習と経験を重ね、いつか大島先生のようなプレゼンテーションができる教師になりたいと感じた。

7.3.2. [日誌] 12月7日(月) 午後 野田先生の講義

学習者からの視点で、日本語の誤用をみるのができたのが良かったです。今日、先生方が議論されていたように、日本語学校で教える日本語と、実生活で触れる日本語にギャップがあることは普段から感じていました。進学のために試験対策や検定対策を行っている、そのギャップを埋めることはなかなか難しいですが、学習者の理解と誤用、そして原因を知ることで少しでもその差を埋められたらと感じました。そういった点でも普段の授業から学習者の誤用に注意し分析していきたいです。そして将来的には、就職や進学前に、目的別に日本語の指導ができるような授業体系ができるようになればと思いました。

7.3.3. [日誌] 12月8日(火) 午前 建石先生の講義

建石先生が教師養成機関の運営をされているということで、養成講座認可校の当校にも関係があることだったため、大変興味深く聞かせていただきました。教案を作る際のポイントについて、時間配分は適切か、文型を使う場面や状況は適切か、その例文は自然会話で使うのか、そんなにリピート練習は必要か、語彙のコントロールはできているか、未習が出ていないか、など具体的な話を聞いて、自分の教案と授業を振り返りました。また、専任講師として採用模擬面接をする際にも、確認すべき点として改めて認識しました。特に、例文や場面設定については、自分ひとりで考えるだけでなく、日本人に聞いたうえで作らなければいけないと思いました。日本語教師が長くなるほど、教室内の日本語・不自然な日本語に慣れてしまい、自然な会話から遠ざかってしまうのだと思います。日頃から自身の言語行動に気を付けたいと思います。

7.3.4. [日誌] 12月8日(火) 午後 栗原先生の講義

講義を通して改めて、「外国人だから」「文化が違うから」は通用しないと実感し、日本語学校に入学した時から就職の準備教育は始まっていると思いました。日本語学校の先生は、外国人や異文化に慣れていますが、日本人みんなが同じだとは限らない、就職すれば日本人と同等に扱われるということを教

えることも私たち日本語教師の役目だと感じました。特に、私は就活の経験も企業で働いた経験もないので、就職を見据えた日本語教育についてはとても勉強になりました。普段の日本語教育と、ビジネス日本語の教育とでは、重要とする点も異なるので、日本語を学ぶ目的を明確にさせることの重要性も感じました。これから学生の将来にとって、必要な指導というものを意識していきたいです。

7.3.5. [日誌] 12月9日(水) 午前 泉先生の講義

留学生に関係する主な就労ビザのうち、主に「技術・人文知識・国際業務」の在留資格があり、また会社をつくる人には「経営管理ビザ」がある。昨年2019年には新しく二つのビザが増えた。まず、「特定活動(本邦大学卒業者)」は、日本の四年制の大学又は大学院を卒業、修了し、日本語能力試験N1に合格、又はBJTビジネス日本語能力テストで480点以上取得した者に与えられる。このビザは、日本語を使う業務であれば、幅広い業務に従事することが可能である。次に、「特定技能」については、学歴要件はなく、日本語能力試験N4以上、又は、国際交流基金日本語基礎テストA2レベル以上、及び分野ごとの技能測定試験に合格していること、現在の在留状況に問題がないことが要件で、最長5年まででフルタイムの単純労働も可能である。

7.3.6. [日誌] 12月9日(水) 午後 村田先生の講義

障害、また障害のある学生にどのように対応していくかについて、理解することができました。その上で、教育者としての関わり方と、支援者としての関わり方は異なることを学びました。これまでも、発達障害が疑われる学生に日本語を教えたことがあります。その度に、どう対応していけばいいかいつも悩んでいました。しかし今日、教師としての役割が具体的に分かった気がします。日本語学校としては相談窓口を作ったり、学生が相談できる外部の機関を把握したり、教員も学生と良好な関係を築くなどして、学生の悩みに気づくことができる環境づくりが、合理的配慮につながるのではと思いました。言語や文化の壁もありますが、その都度柔軟に対応できるように、障害についても知識をつけていきたいです。

7.3.7. [日誌] 12月10日(木) 午前 建石先生の講義

コーパスの活用に興味を持っていたので、大変興味深く聞かせていただきました。中納言は日本語教師養成講座で存在を教えてもらって登録していましたが、普段使う機会がありませんでした。検索画面の項目が多く小難しい感じがして、個人では進んで使おうと思えませんでした。今回、「語彙素」や「長単位」などコーパスの用語を知り、実際に検索したりランキングデータに変換したりすることで、コーパスに馴染むことができ大変勉強になりました。「NLB」は語彙の授業準備で共起表現を調べるのに使用していました。2語比較は使ったことがなかったので、特徴的な語彙を調べるのに今後使いたいです。今後、ことばをよく知るために、また、授業準備・例文作成などに活用していきたいと思います。

7.3.8. [日誌] 12月10日(木) 午後 増田先生の講義

日本語教師が知っておくべき著作権について、著作権自体の存在は知っていたものの、あまりこれまで意識してこなかったことを反省した。教材一つを作るにしても、ネット上からフリー素材と呼ばれるものを使用することにも著作権が関係してくることを知って驚いた。また、教材として著作物をコピーして配布する際にも必要枚数以上コピーしてはいけないなど、今後気を付けていくべき点を確認することができた。現在所属する教育機関でガイドラインがあるのかをほかの先生方と確認していきたい。

7.3.9. [日誌] 12月11日(金) 午前 大阪日本語教育センターの講義

ブレイクアウトルームが最も盛り上がった講義ではないかと思う。学校の運営組織や国籍、授業内容等々でカリキュラムやクラス編成など多くのことが変わっていくので自校にそのまま当てはめられないのは当然なのだが、やはりパターンを豊富に知っておくということが貴重なのだとどの先生も考えていたように感じた。誰もが知りたがり、誰もが話を聞いて欲しがっている印象を受けた。初任者研修ということで経験がほしい同じせいだったのか、今までに参加したどの意見交換の場よりもリラックスして、本音に近いところで情報のやり取りができた。同級生のような感覚だった。

7.3.10. [日誌] 12月11日(金) 午後 森先生の講義

第二言語習得について、忘れていたことばかりでした。ですが、現場に立っている今だからこそ理解できる内容、授業に活かせることがあると思ったので、もう一度復習していきたいと思われました。また言語理解についても、日本人でも同じ日本語の文を読んでそれぞれ違った解釈をしてしまうのに、学習者にとって読解はもっと複雑なものになると気づかされました。その一点に気づいただけでも、これから学生の視点に立って授業に臨めそうです。Excelは今まで避けていたものの一つで、講義の間も難しく感じましたが、今後教師としてスキルアップするためには必要なので今できるうちに行きたいです。

7.4. 事後課題 提出物

事後課題として研修生より提出されたものの中から、以下にいくつか抜粋する。それぞれの課題内容については、4.5.1を参照のこと。

7.4.1. [事後課題] 大島先生の課題

【使えるもの】

- ① 質疑応答の4つのプロセス 質問者にお礼を言い、全員へ言い直して、全員へ向けて回答し、最後に質問者へ確認するというサイクルが、授業内での学生からの質問に答える際に有効だと思った。日々の授業の中で、質問が出た際にその質問者とやり取りしていると他の学生が「見られていない」と別のことをし始めることがあったので、学生全体を大事にするという意味でもぜひ活用したい。
- ② 話し手と聞き手には情報処理の差があるという考え方(自分で丁度いいと思うよりもゆっくり話す) この意識があるだけで、自然とゆっくり話すことになるだろうし、何より、教師本位の授業になるのを止めることができると思う。
- ③ 「間とメリハリ」と「繰り返し」 日々の授業の中で、途切れも無く情報を与え続けていて学生があっふあっふした表情をして、さらにこちらが焦って話し続けるという経験が多々ある。また、話し続けることにより、何が一番大事なかがはっきりしていないときもある。「間とメリハリ」を大事にすることによって授業の流れに緩急を生み出し、大事なことを「くり返す」ことによってより効果的な授業にできると思った。

【使えないもの】

- ① アイコンタクト これはすぐには使えないかもしれないという点で使えないに選んだ。現在完全オンラインで授業をすることが多く、アイコンタクトがとりにくい。ただ、教師がカメラを直視して、学生の画面にはあたかも教師がカメラの向こうから覗いているように見えるようにするときと、教師が下を向いているときとでは、学生にどのような反応の違いがあるのかを調査してみたいと思った。
- ② 配布資料 授業内では、提示資料を用いることはあっても、配布資料を用いることはほとんどない。ただ、配布資料に代わる、提示資料に提示しきれない情報の提供の仕方を工夫しなければならないと思う。
- ③ 授業始めの確認テストはしないという案 確かに、学生のテンションが高いうちに一番大事なことを導入した方が効果的だとも思う。しかし、確認テストで学生に分からないところの気づきを与えてそれを授業内容に活かすという手もあると思った。

7.4.2. [事後課題] 野田先生の課題

【例1：美術、芸術系に進学する学生のための日本語教育】

この学生達に最終的に必要なのは、自分の作品について面接や筆記試験で十分に説明できる日本語能力です。そこではテーマの読解や完成品に至るまでのプロセス、思想、表現したいものや選んだ技法について、できる限り詳しく日本語で述べていかなければなりません。つまり、作品を軸にした自己PR能力が必要になってきます。この場合、まずは作品を表現する日本語を学ばなければなりません。

◆ 具体的に必要と考えられる教育

- ・ 読解 日本人学生による実際の作品と説明から意図を読み取る練習
- ・ 作文、会話 読解と絡めて、特有の日本語表現や語彙について学び、使う。自分の作品を描いた際の思考プロセスを思い出し、言語化する。最終的に自己PRにつなげる。学生同士でPRや講評を行なう。

◆ 他の技能、目的の教育との違い

自己の内面の掘り下げや作品全体につながる思想、作品を伝える上でよく用いられる語彙表現などを学ぶ必要があります。アカデミックジャパニーズのように意見を述べたり論文を読み解いたりするのと

は違い、作品を軸にしていかなければならないという点で、広く学んだ日本語から自分に合った言語表現の使い方を理解し、PRに向けて絞り込んでいく作業になってゆくと考えられます。さらに、進学先で学ぶのがアニメか、絵画か、広告か、製品デザインか、ゲームデザインかといった目的が受験前から細分化されているはずですので、その分野の業界研究や作品の読み解きも必ず行っていかなければなりません。実際に用いられている日本語から自分で使える表現を増やすという、テキストに頼りにくい教育になってくるのではないかと考えられます。

7.4.3. [事後課題] 建石先生の課題

【機能語用データベース「はごろも」】

単語と違い、機能語の正しい使い分けを習得するためには仕組みを理解したうえで多くの例文に触れることが必要である。それを踏まえて、「はごろも」を利用することで学習者の理解があいまいな表現を、いくつかの例文で見比べて、さらにくわしい意味や英語での解説も参照し、その正しい使い分けを習得するのに役立てることができると思った。

7.4.4. [事後課題] 栗原先生の課題

①コミュニケーション不足

- a. 留学生の心のケア不足 b. 技能実習生同士のコミュニケーション不足による喧嘩

《日本語学校での解決策》

日本企業に就職した留学生が職場で不安・不満を感じることを先に先輩から聞いておき、それをまとめて日本語学校の学生と共有する。また、技能実習生同士が衝突する可能性があることについても触れ、その際の解決方法を皆でHRの時間に考え、意見交換し、解決策を導きだすところまで行う。

②日本語の未習得による理解の齟齬

- ・言葉が伝わらないことによる誤解

《日本語学校での解決策》

重要度の高いことを連絡された際には、口頭だけでなく文書で読めるようにする必要があることを伝え、その重要性に気づかせる。例えば、約束をする際は、メモを取ることで、後から見返せるようにすることを教える。そのために、聴解の時間などに、メモの取り方を細かく教える。また、企業で実際に起こりうるシチュエーションを使った会話練習を行う。

③留学生に対する固定概念

- a. 学習障害があっても「外国人だから〇〇できない」と思われる可能性がある
b. お金の横領 お金に対する感覚が違う・外国人だからやりそうと思われる可能性がある

《日本語学校での解決策》

- a. 学生が就職する前に、日本語学校から企業に向けて、事前に学習障害の旨を開示する。そのうえで、学校でどのような配慮をしてきたか、今後仕事をするうえでどのような合理的配慮が必要かを学生とともに考え、企業に希望を伝えておく。
b. 学生には、固定概念を持った日本人がいることを事前に伝えておく。また、企業・地域の日本人と学校が関わる機会（インターンシップや交流イベントなど）を定期的に行い、少しずつ外国人に対する日本人の固定概念を薄くしていく。

④文化的理解

- ・日本人が進めたい会話の順序（会話ストラテジー）を読まずに会話してしまう
・日本人がはっきりとYES/NOを言わない 文化的習慣的な言語の違い

《日本語学校での解決策》

日本語はハイコンテクストな言語であり、日本人は文脈から話者の意図を読み取ったり、明言を避けることが良いとされていることを授業の中で伝える。また、どのような会話ストラテジーを使っているのかを知るために、社内で実際に聞かれそうな会話を文字化し、省略されている語や会話の順序の具体的な特徴をつかませる活動を行う。

⑤仕事のルールへの理解

- a. メール・電話対応ができない b. 報告連絡相談をしない 出退勤トラブル（時間概念）

《日本語学校での解決策》

- a. 中級・上級クラスでは、仕事で使うメールの例や電話対応の例をできるだけ多く見せ、ロールプレイさせる。その際、メールであれば仕事上でよく使うメールの書き出しや敬語、電話対応であれば聞き返し、言い換え、言いなおしの練習を何度もさせる。
- b. 普段の遅刻・欠席についてのルールを明確化し、そのルールをしっかりと守らせる。その際、理由まで述べることを意識付けさせる。これらが守れなければペナルティを与える。また、学生だけでなく、教師全員が時間通りに授業を開始し終了することを徹底する。

7.4.5. [事後課題] 泉先生の課題

1

- ① 文化庁が「地域における日本語教育の充実」を目的とし、以下のプログラムを実施している。
 - ・「生活者としての外国人」のための日本語教室空白地域解消推進事業
未だ地域日本語教室が設置されていない区域に、教室を立ち上げようとする発起人に対し、支援金や専門家によるサポートを提供する。日本語学習者が日本語を習得することで、地域住民と外国人のコミュニケーションを活発にし、外国人の孤立を防ぐことができる。
 - ・他に、文化庁委託・事例の一つとして、広島県では次の取り組みが行われている。県内市町や市町国際交流協会の職員を対象に、外国人住民向けの施策や多文化共生についての研修を2009年度より実施している。研修主体である公益財団法人ひろしま国際センターにおいて、「基礎研修」、「テーマ別研修」、「相談員等ネットワーク構築研修」を行っている。
- ② 外務省「地域における多文化共生推進プラン」
地域の国際化を推し進めていくため、下記の施策を行っている。
 - (1) コミュニケーション支援(地域における情報の多言語化、日本語及び日本社会に関する学習支援)
 - (2) 生活支援(居住、教育、労働支援、医療・保健・福祉、防災)
 - (3) 多文化共生の地域づくり(地域社会に対する意識啓発、外国人住民の自立と社会参画)
 - (4) 多文化共生施策の推進体制の整備(多文化共生の推進を所管とする担当部署の設置や庁内の横断的な連携、地域における各主体の役割分担と連携・協働)

◆ 2020年改訂の概要

外国人住人の増加・多国籍化、在留資格「特定技能」の創設、多様性・包摂性のある社会実現の動き、デジタル化の進展、気象災害の激甚化といった社会経済情勢の変化に対応することが必要だとし、改訂された。

追加修正されたものは主に以下の点である。

- ① コミュニケーション支援→行政・生活情報の多言語化 (ICT を活用)、日本語教育の推進
- ② 生活支援→子供・子育て及び福祉サービスの提供、災害時の支援体制の整備
- ③ 意識啓発と社会参画支援
 - ・ポストコロナ時代の誰ひとり取り残されることのない「新たな日常」を見据えて、多様性と包摂性のある社会の実現に向けて、地域社会やコミュニティ等において必要となる人の交流やつながり、助け合いを充実するための環境を整備することが必要である。
 - ・身分に基づく在留資格を持つ者や留学生といった中長期的な在留展望を持つ外国人住民が増えていること、外国人住民の年齢構成が若いこと等を踏まえ、地域社会において、外国人住民がその担い手となる取組を推進することが必要である。
- ④ 地域活性化の推進やグローバル化への対応→生活オリエンテーションの実施、住宅確保のための支援、感染症流行時における対応

2

留学生に関係するおもな就労ビザとして、「技術・人文知識・国際業務」、「特定活動(本邦大学卒業者)」、「特定技能」の3つが挙げられる。この3つの中で、最も幅広い業務に従事できる「特定活動(本邦大学卒業者)」を取得できるように、日本語学校では日本国内の4年制大学への進学を見据えた指導をするべきであると考えられる。

まず、この「特定活動(本邦大学卒業者)」を取得するための条件として、日本国内の4年制大学あるいは大学院を卒業しなければならない。また、JLPT N1 あるいはBJT 試験 480 点以上をクリアしなければならない。日本語学校では、「4年制大学への進学」、「JLPT N1 合格」を目標に日々の日本語指導をするべきである。JLPT はもちろん、大学入試の際には、EJU (日本語・理科/総合科目・数学)

や、TOEIC や TOEFL、IELTS などの英語の試験、また、志望理由書とそれをもとにした面接など、さまざまな日本語力が求められる。これらの試験をクリアするためには、試験対策だけでなく、面接対策も必要になってくる。試験・面接の直前だけでなく、毎日の授業内で4技能を広く扱うべきである。

また、ビザ申請の審査の際、過去の在留状況に問題がなかったか、という点がしばしば問題になる。つまり、成績状況や出席状況に問題はなかったか、不法就労はなかったか、というようなことである。特にアルバイトの法定時間超過が問題になるケースが多く、日本語学校ではこの点において、学生をしっかり管理しなければならない。成績不振の学生がいないか、その成績不振の原因は何か、あるいは、出席不良の学生はいないか、その出席不良の原因は何かを明確にし、該当学生がいる場合は面談による生活指導が必要になってくる。①学校を休まない(遅刻しないこと)、②集中して授業に臨むこと、③アルバイトのシフトをメモし、法定時間を超過していないか自分で管理すること、④給与明細や源泉徴収票を捨てずにすべて保管すること、を学生に何度も理解できるまで教えなければならない。

7.4.6. [事後課題] 村田先生の課題

1

1. 個人モデルとしての選択肢

- ・ 書くのが苦手な学生がいた場合、パソコンでの入力を許可する。授業中に音声入力や文字をデータ化するツールの使用を認める。
- ・ 視覚が過敏な学生や色覚異常がある学生に対して、授業中にサングラスや帽子などの着用を許可する。

2. 社会モデルとしての選択肢

- ・ 書くのが苦手な学生がいるクラスでは、試験は記述問題を採用せず選択問題のみにするなど、出題形式を変更する。または、記述問題を行う場合はパソコン入力を許可する。その場合、クラス全体として文字に対して評価は行わず、内容のみを評価対象とする。
- ・ 視覚過敏の学生に配慮し、蛍光灯を可能な限り白熱灯に変える。また、配布物には白色の用紙ではなく色のついた用紙を使用する。教室で使用するモニターやパソコンの明るさを下げる。

2

障害(特に発達障害)をもつ学生の来日は増加傾向にあります。それに伴い、学校機関として障害をもつ学生への支援の重要度も高まっています。今後、この傾向はさらに強くなっていくと考えられます。

当校の支援策における、現状から考えられる改善点を、短期目標と長期目標の2つに分け、教務全体で会議を行いました。

【短期目標：6か月～1年】

- ・ 教務内での、発達障害に対する知識・理解を深めること
→本やインターネットでの情報収集、外部セミナー等への参加等。
- ・ 専任・非常勤講師全員での、勉強会の実施
→教師全員が発達障害について学ぶことで、教師間での理解度の差をなくす。
- ・ 障害が疑われる学生との積極的なコミュニケーション
→該当学生と複数回面談をし、情報収集を行う。
→何に困っているか、学校からどのような支援がほしいか、等。
それらの情報をもとに、支援システムの構築に役立てる。
- ・ 教務と事務の連携
→教務から支援案(仮)を提出し、事務とともに詳細を決める。
その際、教務・事務が抱えている職務内容や分担についても相談する。

【長期目標：3年～5年】

- ・ 支援システムの構築
→収集した情報をもとに、支援システムを構築する。
構築後も、定期的にシステムの見直し・修正が必要。
- ・ 支援システムに必要な機材の拡充
- ・ 教師全員が発達障害について理解し、支援システムに則った支援ができること
- ・ 地域の病院や支援機関との連携
→学校から支援機関等に直接相談できるようなコネクションの形成。
- ・ 他の日本語学校と協力、日本語教育振興協会へのスクールカウンセラーの派遣要請

3

- ◆ 静岡県障害福祉課／袋井市しあわせ推進課障がい者福祉係
県や市の単位で障害のある方向けの情報のとりまとめを行っている。そのため、県や市あるいは民間で実施している支援や情報の提供を受けたり、相談をしたりすることができる。税制面の優遇の案内や具体的な相談支援事業所、障害者支援コーディネーターの紹介などが期待できる。
- ◆ 静岡県中西部発達障害者支援センター
地域における支援ネットワークの構築や発達障害当事者からの相談受付などを行っている。発達障害の留学生に対して専門支援員からの支援が受けられる。
- ◆ 障害者就業・生活支援センター「ラック」
障害のある方への就業面や生活面での支援や相談を行っている。就職を希望する留学生に対しての助言などが受けられそうである。
- ◆ 医療ネットしずおか／医療機関
発達障害を診療可能な医療機関を調べることができ、検索結果をもとにして最寄りの医療機関で診療が受けられる。

7.4.7. [事後課題] 建石先生の課題

課題6

「～ないでください」の長単位での語彙素と活用形は何でしょうか。それを調査したうえで、「～ないでください」に結びつく動詞のランキング表を作成してください。また、その結果を「～てください」に結びつく動詞のランキング表と比較して、「～ないでください」と「～てください」に結びつく動詞の特徴の違いを分析してください。

	項目	件数	割合
1	教える	16766	36.72%
2	する	2477	5.43%
3	頑張る	1038	2.27%
4	見る	1022	2.24%
5	上げる	997	2.18%
6	来る	752	1.65%
7	行く	554	1.21%
8	注意する	551	1.21%
9	付ける	543	1.19%
10	遣る	454	0.99%

分析・考察：

どちらも語彙素は「てくださる」、活用形は「命令形」（時折「下さる」が検索に入っている）

検索する語彙素が同じであるため、検索結果も同様。しかし、前文脈とキーを見た限り「～ないでください」の使い方は少ないように感じた。

課題7

「NLB」を使って、「発生」と「発生する」を検索してください。そして、「名詞+の+発生」と「名詞+が+発生する」では結びつく名詞に違いがないかどうかを分析してください。

名詞+の+発生			名詞+が+発生する		
	項目	件数		項目	件数
1	事故	189	1	問題	209
2	災害	84	2	事故	201
3	事件	71	3	事件	188
4	被害	59	4	災害	144
5	地震	57	5	地震	132
6	火災	54	6	被害	128
7	公害	53	7	火災	100
8	障害	45	8	事態	98
9	犯罪	42	9	トラブル	88
10	癌	33	10	権	50

分析・考察：

「名詞+の+発生」は612種類、「名詞+が+発生する」は982種類と、動詞の「発生する」のほうが種類が豊富である。大きな違いは、「名詞+が+発生する」1位が「問題」であること。「名詞+の+発生」は、自然災害や事件、障害や病気といった言葉が多い。

7.4.8. [事後課題] 増田先生の課題

講義でもご紹介のあったフリー素材のウェブサイト「いらすとや」(<https://www.irasutoya.com/>)の利用規約(「ご利用規定」、「よくあるご質問」)を読んだ。利用規約では「当サイトで配布している素材は規約の範囲内であれば、個人、法人、商用、非商用問わず無料でご利用頂けます」(<https://www.irasutoya.com/p/terms.html>)とあり、「自社で作成するプレゼンのスライドや商品のポップなど制作物がその場限りの利用で直接利益を生むものでなければ、仕事で使う場合でも非商用と考えていただいて構いません」(<https://www.irasutoya.com/p/faq.html>)とあるため、規約を守れば著作権法 35 条の教育機関に該当しない日本語学校の授業などでも無料で利用することができるかと解釈した。ただし、オンライン授業の場合は「1 授業 (1 配信・1 動画) につき 20 点まで」という制限があるようだ。また、「素材は規約の範囲内であれば自由に編集や加工をすることができます」(<https://www.irasutoya.com/p/terms.html>)とあることから、素材サイズの拡大や縮小、向きや色の変更なども問題なく行ってもよいことが分かる。

では、私の場合はどうであろうか。上司に確認したところ、当校は著作権法 35 条の教育機関に該当しない日本語学校であり、私の日常業務は日本語の授業を実施したり、授業で使う教材(スライド、プリント)やテストなどを作成したりすることが中心である。そこでの使い方としては、スライドやプリントに挿絵として素材を貼ったり、絵カードとして拡大して使ったりということが挙げられる。また、現在はオンライン授業を実施していない。これらはすべて規約に沿った使い方である。

以上のことから、日常業務では「いらすとや」の素材を利用することがあるが、使い方としては上記規約に沿っており、著作権法上の問題はなかったと言える。今後、オンライン授業が実施される場合には「20 点まで」という規約を守って利用したい。

7.4.9. [事後課題] 大阪日本語教育センターの課題

1

① 人間関係の構築

人見知りの性格もあり、初対面の人たちと打ち解けるまでに時間がかかる。そのため、いちばんの問題となるのが人間関係の構築だと思われる。始めの数週間は早く打ち解けるために周りに合わせようと頑張るが、途中で疲れてしまうだろう。ホームステイ、シェアハウス、学校の寮など、状況によって違うとは思いますが、まずは滞在先での人間関係作りから始めればよいと割り切るだろう。そして、数カ月後には自分のペースで関係づくりをしていくと思う。

② 語学力の伸び悩み

留学の始めはわからないことを多く吸収できるので、勉強も面白く新鮮に感じ、やる気も高いと思うが、数カ月たつと語学力の伸びが停滞してくると思われる。始めは必死に勉強をすると思うがなかなか伸びず、焦りを感じ始める。周りのクラスメートや友人がどんどん上手になるのを見て、どんどん焦りはじめ、空回りする。2～3ヵ月続いた後、あきらめそうになり、そのせいで気分も落ち込んでホームシックになっていると思う。ただ、当時の自分の性格上、学校の先生に相談することはできないと思う。現地ですでた友人や違う所に留学している日本人の友人などに相談することで吹っ切れることができると思う。

③ 母語での相談

日本人が少ない環境であれば、母語で話せる人が少なく、ストレスがたまると思われる。語学留学であれ、母語で話せる友人や相談相手は必要だと思う。行き詰まったとき、日本にいる友人や姉に相談すると思う。留学先の学校で、先輩との交流会などがあれば少し気持ちが楽になるだろうと思う。

④ 文化や習慣の違い

日本特有の習慣と留学先との文化や習慣の違いに戸惑いを感じ、慣れるのに時間がかかると思う。「日本ならこんなことはないのに」「日本だったら…」というようなことを考えてしまい、慣れるのにも時間がかかると思う。ここは外国だから違って当然、と割り切れるまでには時間がかかると思うが、数カ月たてば気楽に考えているだろう。

実際に大学時代に長期留学を経験した。上記は自分自身が陥った状況の一例であり、その時に自分自身がとった行動や考えていたことである。もちろん上記以外にも様々な状況があると思うが、基本的に自分の心情や行動には共通点があると思う。その状況を何とかして乗り越えようと努力をするが、空回りや失敗でうまくいかない。ひとりで考え込んだり悩んだりして気分が落ち込んでしまう。しばらく落ち込んだ状況が続き、どこかで吹っ切れたり、割り切れたりする時が来る。そこからは、楽に考えるこ

とができるようになり、留学生活を楽しめるようになると思う。吹っ切れるまでにどのくらいの時間がかかるかはわからないが、当時の自分は時間がかかってしまっていた。だからこそ、今留学生活で同じようなことで悩んでいる学生や、悩んでいることを相談できずに一人で考えている学生のフォローができるように、目を配っていきたい。

2

① 生活指導

◆ お金に関する指導

留学生が日本へ来て一番困ることは物価の違いで、自分で学費を支払っていたり、国に仕送りをしていたりと、経済的に苦勞している学生も多い。勤務校でも学費の支払いに困っている学生が少なくない。また、親元から離れて日本に来ているため、お金の使い方がわからない学生や、金銭感覚が身についていない学生も多い。収入と支出などをノートに書きださせ、その中でどうやって生活していくのかを自分で考えさせているというお話を聞き、そういった指導法もあるのだと驚いた。ぜひ取り入れたい。

◆ 出席指導

出席状況が悪い、課題を出さない、授業に参加しない（寝てしまう等）等、毎年指導に苦勞する学生が数名いる。何とかして出席させなければ、何とかして勉強させようとするので、その学生への指導にかなり時間を割いている。そのたびに、本来であれば頑張っている学生に時間を割いてやるべきなのに、という葛藤がある。何度指導しても改善がみられないのであればあきらめることも一つの選択肢だというお話を聞き、納得をした。無理にさせることが正しいわけではなく、本人の意思で決めさせることも必要だと感じた。

② 日本語指導

◆ 漢字指導

漢字学習は漢字圏学生にとっては簡単な内容になり、非漢字圏学生にとっては非常に難しい内容になってしまう。同じクラスに漢字圏と非漢字圏の学生が混在すると、進度にも差が出てしまう。今回の研修で、学生同士に教え合わせたり、先生役をさせたりすることで、漢字のレベルに関係なく学生自身がやりがいを持って楽しそうに取り組んでいるという話を聞いた。漢字学習に限らず、全て教師が進めるのではなく、学生に主導させながら進めていくのも面白いと思う。

◆ 筆記の実用性

必死に漢字指導をしているが、実際に手書きで漢字を書く機会は少なく、試験対策で十分だと言うお話を聞いて、確かにそうだと感じた。試験以外で実際に書く機会はかなり減ってきている。時代に合わせて、どんどん方法を変えていかなければならないと思う。学校で1人1台パソコンを準備するのは難しいだろうが、ケータイはどの学生も持っているので、ケータイを使ってタイピングやメールの書き方の練習等、ニーズに合わせた練習を取り入れたい。

◆ 成績管理

試験の平均点は出していたが、各問題の正答率まで確認をしていなかった。そのため、個々の問題が適正かどうかなどの見直しができなかった。今後は、研修で学んだエクセルの処理方法を使用し、試験問題の見直しを行っていきたい。

③ 日本語教師の癖

◆ 実生活での日本語

自分が教室で使う日本語が実生活で使われている日本語と離れていないかを再度考えなければならぬと感じた。教科書で習った日本語を使って話すという意識が強く、日常生活では使わないような表現で話してしまっている。学校での日本語は聞き取れるのに、社会に出ると日本語がわからない、という学生もいるので、教科書通りの型にはまった話し方はやめなければならないと思った。

◆ 相手の話したいことを先読みしない

留学生の日本語に慣れているため、相手が話そうとしていることが途中でわかってしまい、つい「～ということ？」と先に聞いてしまうことがある。また、間違った日本語を言った場合もこちらで言い直して終わらせていることが多い。先読みして相手に確認すれば時間もかからないが、それでは卒業後に学生自身が困ることになってしまう。今後は先読みせずに学生に最後まで話をさせ、自分で説明する習慣をつけさせていこうと思う。

7.4.10. [事後課題] 森先生の課題

言語習得

【インプットとアウトプット】

学習者に日本語を指導するうえで、特に会話の際にどこまでエラーを訂正したらよいのか気になっていた。ある程度意味が伝わればそれでよいと言われると、学校の中ではよいかもしれないが実際の社会では間違いが少ないほうが良い。そこで、会話の中でのフィードバックとして否定証拠を与え、正しい表現をインプットさせることは大切だと感じた。特に教師と学生間だと、やさしい日本語になれているので多少の間違いには目をつぶってしまうこともあるが、この否定証拠をうまく使って正しい日本語を話すことができるよう、細かく指導していきたい。また、学習者に自分の能力を知ってもらう「気づき仮説」も同様に大切だと思う。学習者自身で自分の伝えたいことが、どこまで自分の能力で可能なのか。その気づきがさらなる学習意欲へつながると考える。

言語理解

私が実際の読解学習で大切にしていることは、練習の前にテーマと状況を提示することだ。何も事前知識がないまま読んでいくことももちろん大切だと思うが、それは試験対策の練習で十分だと思う。

読解力を培うために、今私が実践している練習方法は、

- ① テーマを導入し、状況を理解させる
(テーマを提示することで、学習者もある程度推測でき、読解練習に入りやすくなる)
- ② 時間があればテーマ導入の際にクラス全体で話し合い、今までの経験などを共有する
(そうすることで読みやすくなり、状況が想像しやすくなる)
- ③ 一定時間を与え、文を読ませる
(早く読めた学生には何度も読ませる。辞書は使用しない)
- ④ 大筋の内容をグループで確認、内容理解に関する問題があればグループで考えさせる
(グループでどのような内容だったかを理解させることで、個人でわからなかった部分を解消する)
- ⑤ 全体で大筋確認をしながら答え合わせ等を行う

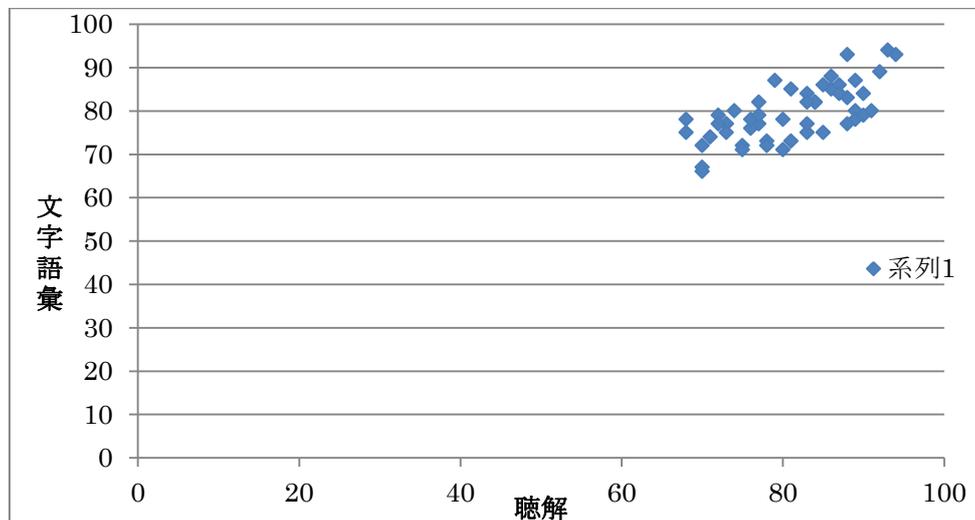
読解授業で主に目指していることは、

- ・ 文章内に出てくる語彙や文型を全て理解していなくても、大筋を理解できること
- ・ 文章の大筋を自分で簡単に要約し、説明できること
- ・ それに対して自分の意見や感想を述べられること

学生たちはわからない語彙があれば全て調べようとするが、中上級になればある程度推測して読んでいく力も必要になると思う。読んで終わり、内容を理解して終わり、ではなく、まとめる力や考える力を合わせて伸ばしていきたい。

成績管理

(1)



(2)

	聴解	文字語彙	文法	読解	作文
聴解		0.685123	0.300921	0.171888	0.360589
文字語彙			0.499193	0.377259	0.430797
文法				0.810095	0.768527
読解					0.733882

(3)

学生番号	聴解	文字・語彙	文法	読解	作文	合計	クラス
41	94	93	95	100	100	423	1
50	83	82	91	88	91	394	1
43	87	86	90	86	83	392	1
29	93	94	85	87	96	388	1
30	88	93	90	83	89	384	1
33	89	80	89	84	87	375	1
39	86	88	80	80	78	373	1
23	83	84	88	91	90	369	1
44	80	78	83	82	84	367	1
46	85	86	75	74	73	366	1
45	81	73	81	85	83	365	2
49	77	79	80	80	82	365	2
14	92	89	85	84	82	364	2
17	86	85	88	87	87	363	2
42	83	77	81	80	82	363	2
16	79	87	89	89	82	360	2
27	76	76	90	91	84	360	2
19	89	87	80	84	76	359	2
34	88	83	79	74	73	358	2
47	87	84	72	68	71	358	2
40	80	71	78	88	88	357	3
12	90	84	87	83	89	356	3
48	76	78	74	77	71	353	3
28	78	72	87	87	87	352	3
38	91	80	74	69	78	352	3
37	90	79	73	68	77	347	3
36	89	78	72	67	76	342	3
5	81	85	84	83	90	338	3
31	84	82	69	71	76	337	3
35	88	77	71	66	75	337	3
21	73	77	80	83	73	334	4
13	85	75	80	80	83	333	4
6	73	77	85	89	90	330	4
26	68	78	77	81	76	330	4
24	73	75	77	80	78	329	4
25	72	77	74	79	78	327	4
3	84	82	77	80	78	326	4
32	71	74	74	73	76	324	4
22	78	73	69	78	74	320	4
15	74	80	80	70	77	319	4
4	77	77	78	78	81	314	5
2	77	82	70	81	72	312	5
7	75	71	75	84	81	312	5
18	72	79	73	69	78	311	5
20	83	75	63	70	79	311	5
1	75	72	77	79	68	304	5
10	70	72	76	75	80	303	5
8	68	75	78	73	81	302	5
9	70	67	80	71	75	297	5
11	70	66	61	62	66	270	5

7.5. 事後レポート 提出物

事後レポートとして研修生より提出されたものの中から、以下にいくつか抜粋する。

7.5.1. 研修で学んだこと

- (抜粋) 今回の研修は、講義だけでなく、一緒に研修を受けた他校の先輩方の意見が大変参考になりました。使用教材について、漢字の練習方法について等の情報交換だけでなく、自分の現場では起きていないが大人数の学校や専門学校の日本語学科で起きていること等の情報も知ることができました。私は経験1年程度で、まだまだ知らないことがおおいと痛感しましたが、ほかの日本語学校で働く先生方との意見交換は、大変貴重なものでした。
- (抜粋) まず1点目は、全体を通して、自分自身の「無知」を知ることができたということである。この研修を通して、自分が知らないことは、それを「恥じる」のではなく、「まず知ることが成長の第一歩」であるということ再認識できた。この研修では、違う環境でありながらも、同じ立場にいる受講生たちと、「知らないこと」を共有しながら、それを自覚し、「知る」ことの面白さを再確認することができたのである。私は、実際、日々目の前の業務に精いっぱい、自分が「知らないこと」に向き合う時間が少なかったと思う。「教師」として「学生」に、いつもよく学ぶようにということには、ある種の責任があるようにも感じた。

7.5.2. 今後の日本語教育に対する抱負

- (抜粋) 何ができるのかと考えた時に、例えばカリキュラムの一部を選択科目にするとか、担当科目のテキストなどをニーズに合うものに変更する提案を出すとか、そのような思い切り方なら今の私の立場でも進めていけます。特に選択科目は技能別（読む、書く、聞く、話す）、目標別（JLPT、EJU、BJT）、目的別（進学、就職のうちで細分化）などで必要性を感じていたところなので、今回の講義を受けて、変化させていくべき方向性として間違いではなかったのだと確認できたことは大きな成果でした。
- (抜粋) 日々の業務に追われ、今後の目標についてじっくりと考えることがありませんでした。今回の研修を受け、日本語教師を目指した理由などを思い起こすこともでき、自分がどのような日本語教師になりたいのかを再度考える良い機会になりました。
- (抜粋) この研修を受ける前、正直、日本語教師としてのモチベーションが下がっている状態でした。日々の業務に加え、受験指導でかなり精神が参っており、ろくに授業準備ができない状態で教壇に立っていました。「日本語を教えたくて日本語教師になったのに、このままでいいのだろうか」という気持ちでいました。しかし、5日間の研修を終えて、自分が日本語教師を志した時の気持ちを思い出し、「もっと日本語教師として成長したい」と、モチベーションを取り戻すことができました。日本語教育は経験がものを言う世界であり、経験あるのみだと、日々の業務で実感していますが、それにとらわれず、チャレンジしていく気持ちが大切だと思いました。